前橋より

上野第一の都會、松平氏十七萬石の舊城下、鐵道や利根川の舟運、市の繁華を助け、近國に於ても亦敵なき地に候。訪ふべきは城址、東照宮八幡神社、八阪神社岩神の飛石、其他寺院等にござ候。

伊香保より

戸數約五百の溫泉場物聞山は名高く、榛名山へは、此處よりするにて、二里十五町に候。伊香保神社の境内は、眺望極めて宜しく候。

榛名山

妙義、赤城と共に上毛の三山と呼ばるゝ名山、最高を掃部ケ嶽と稱せられ、直立三千五百尺、古來和

○風流

きかなど、樣々の情景胸に描き居り申し候。此次と申せばとて、日曜日は明後々日、早朝より電車の人となり、遲くも九時迄に、御宅へ參り申すべく候。拜酬。

松茸贈られし禮

◎來信に曰く。世は秋冴に深う、敝地は茸の出盛り、殊に上出來にて、稻作と共に豐年、栗も柿も亦近年に稀なる成りかたに御座候。君には、單に御墓參のみの御歸省と存じ候に、今以て御來阪なきは如何。詩趣何かの點より、俗地厭はしう成り給ひし乎。

今朝、高槻在の友より、松茸贈り越し候。別便の小包にて御覽にと呈せるは、即ち其内の幾部かに御座候御地方には、茸なしと豫て承知仕り居るのみならず、年々催せる茸狩の事、思ひだし給ふ樣にとの心もこもり居る次第、能く御味ひ願はしく、皆樣にも此由御傳へ煩さんとする僕に御座候。

多年御趣向の御日記は如何に、七八分は既に御脫稿昨今は靜けき御鄕里の舊御書齋にて、御推敲の外御餘念在らせまじと存じ候。まじとは、固より推量の語に御座候も、其儘に再び御來阪なき樣になりてはとの心配も籠り居り申すに候。書けばとて、仲々に盡し難く候へば、又改め筆執り申すべく、茸の序に由なき事ま

歌文章に上ること多く、山中には奇岩、溪流、沼湖の明媚なる、神祠の莊嚴なる記するに多忙なるに候。例の日記にて、御覽願ふべく候。

赤城山

最高を黑檜山と申され、他に鈴岳、地藏篠倉、鍋割の五峰に分れ居り候。山上まで、四方の部落より三里乃至四里。山中には赤城神社、大沼湯の瀧等、みな探るべきの勝に之れ有り候。又、珍奇の植物多く、山上より眺關八州の山河を双眸にせらるゝに候。

太田より

金山に新田神社を訪ひ、古今の事ども感じ申し候。地は新田氏歴代の城ありし地

で聞え上げ候。拜具。

萬事夢には能く上り居り候も、御不沙汰するは昔に變らぬ僕、何卒御ゆるし下され度候。御厚意の松茸は、今日の午頃に落手、包裝解けば猛香鼻孔を穿ち、食ふよりも茸狩の興、目前に浮び出で、上阪の後れしを悔ゆると轉深きに候。後れしは、故郷の山水に別れ難きも非ず、大阪嫌ひになりしにも非ず、二十幾年振かの歸省にござ候へば、隨分感慨も多く、却て他郷の如き感あるは、當時の人々、何れも冷たき石となり居るが爲に御座候。御推量の歸省日記は、容易に筆執り難く、只大綱のみ立てし位、推敲ごころの騷ぎに非ず。序に幼少の時訪はざりし地など、此際に探り居りし事にて、斯くも引返す儀後れしに候。尙、當分田舍には鋭氣養ひ度、冬中には必ず大阪の土蹈む筈に御座候。舊吟友へ御面會の折は、宜しく御傳へ願ひ上げ候。不盡。

追て、本日呈せる國の名產、甘くはなく候も君は一度賞し給ひし品、御受領願はしく候。

蠣贈られし禮

◎來信に曰く。交通開けて今日、何も珍しからぬ蠣と存じ候も、今年は極めて上出來に之れ有り、所有の田のもの殊に評判宜しく、自慢の一として鐵道便煩し

に候。又、高山神社をも訪ひ申し候。これは慷慨の士、正之の靈を祭れるものにこれ有り、二社共に縣社に候。

桐生より

關東に於ける一大機業地、京都の西陣と相匹敵し、商取引最も殷賑に、伊勢崎などは、其下風に立つに候。丸山公園は舊城址にして、渡良瀬川に枕み、眺め宜しく候。城は治承の頃桐生六郎爲顯の據りしものに候。

宇都宮より

關東に於ける屈指の都會、市坊六十一東西一里十二町、南北一里二十三町、麻や千瓢、繭や生絲、馬市など開かれ、繁華比なく候。もと戸

○風流

たる次第、御試驗願はしく候。草々。

遠方の處、美事なる蠣の御惠贈有り難く、先づ第一に御禮申し上げ候。これにつき、奇談出來申し候。と申すは餘の儀にも非ず、蛤が栗に似たるより、此蠣の柿に似ざるは如何、とは太郎が質問。割りなば、中より蛤が出づべしとは、殼の樣栗のいかに似しよりの誤解か、是は初子が申し條、樹になるかとは二女、稻のやうに水田に植うるのとは、次郎が利口振ての言。是は御書の田の字を見ての論に候はん。をかしき儀には候へ共、百聞は一見に如かずと申す事、目前に證據立てられ、何より有難き蠣、兄弟等には好敎訓と相成り申し候。

○遊覽

遊覽とは、俗に云ふ見物の事で、主に名所古蹟などを尋ね廻るを云ふのです。俗人さへ樂しく思ふ處々見物の旅行、筆執る吾々が愉快に感ずるは當然の事でせう。只斯んな旅、自由に出來ぬが殘念と申すものです。眞の遊覽と申すものは、風土を記しては敎化を助け、花月を吟じては唱歌に入ると申しますも、是等の事は先生達の筆の事で、吾々の事ではないけれども、此心持で居らねば爲りますまい。僕が處々より便したのは、勿論の事でありますが、人の旅するに贈つた文も載せて置きました。

田氏七萬七千餘石の城下、その城址は市の南に存す。公園は中央に之れ有り、二荒山神社、招魂社ご覧候。觀るに足るの寺、亦多く候。

栃木

曾て縣の治所たりしも、宇都宮に移されし以來、終に往昔の繁華を存せずといへども、亦名邑たるを失せず、生絲、繭、木材、切石等の産生多きに候。又、錦着山は、此地の勝區四方十餘町の所に候

○

太平山公園は、市御の西方約一里、山上には太平山神社之れ有り、眺望を以て名を馳するの地。

足利より

繁華は宇都宮に亞ぎ

近畿に遊ぶ友に

心のみか、詩筆まで動き易き此頃、詞兄には御探勝とし て、近畿へ遊び給はんとや、羨ましくも亦御風流の旅と申すべく候。十年前の大阪や京都とは違ひ、様々なる目新しきもの之れ有り申すべく、成るべき細かに筆執り給はん事に願はしく候。この儀、御便まちて坐らに、其實地に接せんとする横着には非ず、御紀行の面目を新しうすべしとの鄙見にござ候。更に進みて望むは、詩人としての御觀察のみならず、時には史眼をも開き給ふべく、是も御紀行の面目を新しう致すべく候。僕などは、一も二も詩で行り通すと申す一筋、世に後れしも是が爲かと今更悟り申せる事共にござ候。殊に京都は、四時共に宜しく候も、今は花の繪卷物に異なり申すまじく、大阪より東し給はゞ、東寺の塔は彼方に低う、先以て詞兄迎ふべく、同時に京はよき處との念、御胸中に沸きかへり申さん乎。此言、うそか眞か、迎へらるゝ時を待ちて知れ申すべく候。洛中洛外は、おろかの事、滋賀までも及ぼし給へ、奈良や芳野にも和歌浦にも及ぼし給へ。又此次にと言ひ給ふが最期、容易に其折來まじく、近き處にても此事あるを、況して二百里を出でし給ひし旅、二度と二百里、遊びとして出られまじく候ぞ。

足利氏の故郷に候。當時文物夙に開け其舊跡町の附近に散在し、今にも尚足利學校の名殘を傳ふるがござ候。現に町の有志を選びて保護員となし居るに候。

日光より

德川氏の祖廟にて名高き此處、東照宮の偉麗なるは申す迄もなく、湖と云ひ瀑と云ひ、一々筆に上せきらず。その溫泉と申し、日光裏山と申し、訪ふべき景は百も千も之れ有り、一日や二日で盡すべくもあらず、此處ぞ得意の繪葉書や、案内地圖買ひ、今度の旅の説明に代へおき候へば、必ず諾め給ふまじく候。

鹽原溫泉

○遊覽

◎返信に曰く。實に何するにも宜しき昨今、旅は又格別の事と、終に三年前より思ひ立ちし希望、遂げんとす小生に候。つれは之れなく候も、飲徒よりも仲よきは一本の筆、これが今回のみちづれ、六ケしく申さば管城子と共に近畿遊覽の旅試みるに候。

命のやうに、大阪も京都も何處も彼處も、今は大に諸面目改めし事と存ぜられ候へば、知り得し丈の沿革をも其變れる理由をも見出さるゝ丈見出し、事細かに筆執り申すべく、花月の情のよしあし、さては社寺の位置現狀等に、徒らに墨塗りつけ申す間敷、成るべく方面代へ候て、趣味多く書きたきものと存じ候。

大阪は殊に以前と變りし由、名所古蹟は兎も角も、書くべき新しき材料多き事と存じ居り候。東しての京都は申すに及ばず、御示しの塔に迎へられ、忽ち太古に旅せる心地致され申すべく候。そは何故と申さば、大阪より入りし小生に候へばなり。二三日、京に筆携へ、御所を最先に、何處の春をも日記に留めて、何時迄も老いしめ申すまじく候。

二百里を再び出直し難しとの命、げに然る事と存じ候も、欲は七八分に留めおき申す考へ、琵琶湖は一寸眺めおき、奈良へは一泊すべく、芳野の花には涙灑ぐまじと存じ候。何も彼も追々郵箋にてと。拜答。

此處、山水の勝と靈泉と、近年に名を揚げし地、關屋村よりは一歩一景とも申し度、急流あり、奇岩あり、絶壁あり。大綱に近づけば見返橋その谷を俯すれば見返瀑掛り居り、山送り山迎へ、山路の險を忘れて、大綱温泉に達するにて、他にも數多温泉之れ有るに候。

見た儘の大阪を

素通りの神戸、久しく逢はぬ友に心ひかれ乍ら、終に後に致し候。乘心地よき電車は、棚引く春がすみ縫ひ候て左に武庫一帶の連山、右には大阪灣萬頃の碧波、見るからに畫中に行くのおひも成し、東へ〳〵と進むに候。殊に山手には櫻ちらほら、處々には酒旗さへ飜り、海には松原越に見ゆる白帆繪よりも美しく候て、瞬く中に八九里の行程、此處は早くも梅田となりしに候。

水の都と申す實は、今此にて知り難く候も、打ち見たる所にては、鐵道の大阪とも申すべくと感じ候。先づ東

北陸だより

敦賀より

浦鹽へ航海開けて最も繁華に相成り、以前の敦賀には非ず候訪ふには氣比神宮、金ヶ崎宮、松原神社南朝のむかしを弔ふには、金ヶ崎城址にこそ。明治維新の際に於ける、耕雲齋の孤忠を弔ふには、氣

北より來る東海線、北に去る阪鶴線、築港に向ふ西成線東南に城を遶る城東線。電車には市内線、箕面線、阪神線。以上は何れも城北の梅田よりするものに之れ有り、田舍飛出の者は、行先に迷ふ程に驚かれ申すに候。外に城東の北端には網島の關西線、同じく櫻宮と加茂間線も之れ有り、天滿橋の南詰には京阪電鐵あるに候。城南の東には天王寺住吉間の電鐵、稍西に下れば惠美須濱寺間の鐵道、難波方面には南海鐵道と電車、湊町に至れば關西線これ有り、天王寺に於ては城東線と相合し、天下茶屋にも至るを得べく候。更に西に至れば幸町の汐見橋に高野鐵道ありて、電車をも用ゐ居り候。市内は申すに

比の松原にこそ。極めて古意多き、此處敦賀にて候。

福井より

金澤に亞ぐの都會に之れ有り、松平氏の舊城下に候。もとは北の庄と申され、柴田勝家の居城地、その亡びし事は史に詳しく候。九十九橋は有名に候。

○

及ばず、市經營に係る電車蜘手十文字に馳せ交ひ居り、交通便利に御座候て、朝の四時より夜の二時迄、通ひづめにて、梅田難波間は徹夜通ふに候。

一たび水の都と呼ばれし大阪、鐵道の都と申したき程に御座候も、水は今に尙此地の生命とも申すべく候。淀の荷船が旅客を送りし昔より、安治川口に出船千艘入船千艘の盛況を謠はれし當時より、二千餘萬金の黃金を埋めて作りし築港の今日まで、此地の富は水に在りしに候其誇りも亦水に在りしに候。然れども、時勢は稍この實を失ふの感なきに非ず。その半は鐵道に奪はれ、その半は神戸港に奪はれたる樣に考へられ候。況して、築港内

足羽山は、市街の南隅に在る丘陵に之れ有り、祠あり堂あり酒樓あり、心目を慰するに宜しく候。藤島神社、新田義貞及び脇屋義助、新田義宗、同義顯、同義興の靈を祀れる別格官幣社にござ候。橋本左内の墓は、之を善慶寺に訪ふべく景岳先生墓と刻しあるに候。

にて大汽船の衝突するが如き、築港の甲斐一も見え申し居らず、世の苦情、打ち消し難く候はん。

大阪市は東西約二里、南北約二里半、戸數二十一萬餘に達すること。水は幅員百三十間の傳法川より、四間に足らざる東大井路川の末に至る迄、大小三十八條、汪々たる水、常に市内を縱横に貫流するに候。此延長實に七十九里餘に候。之に架する大小の橋梁、二百四十二臺、其最も名高きは天神橋、天滿橋、南北に相接して架せる難波橋、高麗橋、十字に流れし水に架せる四ツ橋は、電車通じて以來、二橋變じたれば舊の井字形の奇觀見るに由なく候。大阪に於ける釣橋の元祖たりし心齋橋は、美

永平寺

禪宗曹洞派の本山に之れ有り、志比谷村大字志比に在る名刹に候。境内には、堂塔高下として聳え、極めて莊嚴に候。

再來古佛逞風流
白雲調高五百秋
夜靜更闌人不待
一輪明月掛西樓

とは、無隱が永平禮祖塔に題せるもの。

三國より

北國著名の港邑、もと阪井と申せしに候九頭龍川の東岸に位し、貨物の集散繁多に候。鐵心の詩に

海亭斫膾又飛杯
日落遙空一碧開
掠面雄風吹不斷
直從靺鞨捲濤來

又、三國神社は、縣社にして、境内は眺望に宜しく候。

しくも磨ぎ出されし石橋に架け代へられ、北の新地に臙脂漲らせし蜆川は、彼の大火後に埋められ、きぬ〴〵の別れ惜む蜆橋の柳、細腰を東風に弄したるも今は夢、橋と共に影も之れなく、次に架りし曾根崎橋も絶え、優しきの櫻橋の名は、僅かに電車停留所の呼聲に殘り居るに候。

大川の納涼は、名物の一に數へられし由に候も、此八九年以來、畫船水を壓して陸地に同じき繁華を現ぜず、日々に輕薄に流れて新奇を好む人情、誰も彼も電車などを利用して、山や海やへ赴く爲に、斯くも寂びれゆきしに候。げに然に候はん、煙草一服吸ふ間に、北は箕面、寶塚。南は大濱や濱寺、西は西宮なり住吉なり、さては香櫨園。東は枚方などへ容易に往復出來る昨今に候。殊に昨年來より、淀川筋の兩岸埋め立てられ居り、水の都の實、益殺がれつゝ之れ有り候へば、僕が最初に申せる如く、鐵道の大阪と呼ばるゝに至るべく候。

大阪に於ける商工業の現狀、市の内外に散在する幾多の名勝古蹟、精しう此に記し得べくも非ず候も、大阪舊城と天王寺とは、南北一双の偉觀、聊か聞え上げ、以て此書信の殿に代へ申すべく候。

舊城は、遠くは中之島公園より望むべく、近くは天神天滿二橋よりも手に取らるべき眺めに御座候。東雲の景

東尋坊

此處、國中第一の奇勝、三國町の北約一里の處に候。懸崖聳え、怪石かさなり、水は深くして底を知らず。岬頭は方二町餘、千疊敷との名ござ候。前面なる雄島は、神祠ありて且つ勝に富み、此處と共に人口に膾炙致し居るに候。

勝山より

小笠原氏の舊采邑城址は櫻と楓とに富み、且つ展望に宜しく候。人口七千三百餘、生絲と煙草は名產に候。

大聖寺より

江沼郡の治所、もと前田利治十萬石の城下に之れ有り、市店櫛比し、商勢も亦極

○遊　覽

は四時共に宜しく、春は終日霞こめて優しく、青松粉壁おぼろに、徒に書生をして豐公の覇業を追懷せしめ易く候。さても、大阪城の舊地は、石山本願寺の跡と呼ばれ候も、今に確かならず候。訪ふには、內本町を東に上りつむるれば、之を東北に仰がれ、大手町より東に進みなば直に得べく、京橋よりは南に上りて達すべく候。

城の內外には、年經る松の數多く、春風靜かにその梢度るにも、豐臣氏末路の事に想ひ到り易く、小琴の曲として聞き難く、一に悲しさ勝りゆき候。現存の城址は周回一里餘、方約九町、本丸二の丸の二郭に區分せられ、外郭は卽ち三の丸に候。凡そ內外東西二十餘町、南北十八町餘、本丸は第四師團の司令部と相成り居るに候。其餘の歷史は暫く御預け願はしく、城內觀覽は辛うじて遂げ申し候。天守閣に上れば、四顧の雲烟を縱にし、全市を脚下に蹈まへ申し候。上水池も城內に設けられ居るに候。天王寺は、城よりずつと南、電車は直に其西門まで參るに候。

大阪城に上りて、夙に人間の興亡を感じ候ひし僕、今し天王寺を訪はんとするに候。上本町七八丁目より、電車迎へしは五重塔、雲に聳えて雄々しく、塔尖に烟る風情見ゆるは、花曇の霞に候はん。やがて潛りしは西大門にして、石の鳥居ござ候。掲げし額には釋迦如來轉法輪

めて繁華に候。物産絹織物、陶器、茶鉛筆等に候。山代温泉へは、一里二十町餘、南少し東に候。

山代温泉より一筆

大聖寺より約一里二十町、今日此處の客舍は概ね宏壯、浴室の準備も大したものに御座候ひき。

所當極樂土東門中心の十六字、聖德太子の筆とも小野道風とも、弘法大師とも申され居り、一説には三井の長吏慶遲が弟子慶燿の傍には法華堂、念佛堂ござ候。門内には五智光院、經藏ござ候。南大門は、廻廊二王門の南にして、傍には萬燈院、その南に太子堂ござ候。此には聖德太子を奉祀致すに候。猫門とは、此堂前の門、左甚五郎の手に成りし猫の彫物を置くが故の名に候。龜の遊ぶ池を萬代と申す由、外にまだ池之れ有り候。

大塔、金堂、講堂の三宇は、廻廊に圍まれ居るに候が此延長百五十間、金堂は桁行十間、梁間八間、本尊は如意輪像、東壇四天王を安置す、何れも西面致すに候。此堂の北に講堂、無常院は鐘樓に之れ有り、六時堂の前に訪ふべく候。彼の半空に湧出せし大塔は、見上げ難き高さにして五層、寶鐸四檐に掛りて、人語は半空に聞ゆる風情に候。一時は上るを許せるも、近年は危險を慮りて禁ぜられ居り候。その事に御座候。

寺域は約二萬五千坪、大小の堂舍四十餘宇、皆頗る觀るべきものに候。大釣鐘は、十四五年前に聖德會の鑄造に係るものに御座候。抑も當山は、浪華第一の古刹、荒陵山敬田院と號し、聖德太子の御創建に之れ有り、宗旨は

山中温泉より一筆

山代温泉と甲乙なきの此處、地は大聖寺川の上流に之れ有り風光の美は、山代と同日の論にならず、古來文士の紀行少なからず候。漆器は此地の名産、所謂山中塗なるものに候。

那谷寺

此處、那谷寺は北國にて有名なる眞言の巨刹、且つ勝景一々擧ぐるに遑あらず候

動橋驛より東南一里餘、山代溫泉よりもせらるゝに候。又大字菩薩には、法皇陵と呼び、傳へて花山法皇の山陵と申すがござ候。

三湖臺にて

木場、柴山、今江の三湖を能く一眸にするよりの名に候。一に御幸塚と申すは、花山法皇の御登臨になりし故の稱。湖のみならず、日本海を眺め、無限の詩景を領し得られ申し候。

小松より

金澤に亞ぐ國中の都會、機業最も盛んに候。初めは村上氏丹羽氏相踵ぎ、のち前

天臺、歷代崇敬淺からざる精舍なりしに候。初め、明帝の二年、玉造の岸に建てられ、推古帝の元年、荒陵の東に移されしにて、即ち現地に御座候。

境内は到る處、茶店酒閣高下として相接し、宛然たる市街に候。老樹に交へて植ゑられし櫻は、折しも開き盡して香雲を棚引かし、長へに寶刹を護する貴さ、公園たるにも恥ぢずと申すべく候。二十餘年前までは、極めて淋しき淨境にして、萩見に來る人の數ふるばかりなりし由に候も、今は香客遊人ひきもきらぬ樣に候。あはれ、絕代の英雄豐太閤の覇業は跡なきも、佛法は眞に千古不磨と申すべく、聊か僧の肩持ちおき候。

四國巡する友に

四國巡と申せば、少し品の惡い樣に聞え候も、貴兄は固より然る儀に非ず、羨むべきは風流極る御旅に之れ有り感ずべきは京阪地方を捨て、他の足跡稀なる四國に志し給へる儀に御座候。一寸物書くに致しても、四國と九州は參考書少なく、困らぬ人とてなかるべく候。今度の御旅行は、是等の缺點を十分に補ひ申すべく、又その御積り願はしく候。此旅は、僕も常に遂げばやと思ひしものに之れ有り、靈場の一番より順に訪ひ、これを中心として、四邊の名所古蹟討尋せんと期し居りしに候が、貴兄

田氏の領と相成り、利常が老を養ひし地に御座候。すべて此附近は要害にして、古戰場に候。

松任より

金澤に近き一繁華の地に之れ有り。城址は驛の前面に存し居り候。女詩人千代の墓は、聖興寺に之れ有り、月を見てわれもこの世を急ぐ哉と

は如何なる順立てゝ、細う尋ねん事を期され居る乎。何れに致しても、容易ならぬ御旅と存じ候。人の情として行程の遠近、又は地の便不便によりて、訪ふ事にも自然偏頗生じ候はんも、是等は勉めて其弊なからん事相祈り申し候。苟も名所と呼ばるゝものは、十里の迂回をも辭し給ふまじく候も、山などの危險は強ひて冒さぬが宜しく候。石槌山には、日本一の瀑あるとの事に候も、今に誰も見しものなき由、是等は大瀑布の有るにしておき害なく、實否又は其高さ知らんとするは、所謂好奇心に驅らるゝもの、僕は取らず候。愛媛の面影と申す本は、仲々精しく候が、是は實地探討の筆、愛媛縣廳に之れ有る

の辭世の句を刻しあるに候。

金澤より

前田公百萬石の御城下、北國にて一二を爭ふの大都會、市街は東西一里餘、南北一里十三町餘、戸數約一萬八千、商業も亦繁華に候。舊城址は、中央なる一丘陵彼の有名なる兼六公園は、此處に在るに

筈、御序に見ておかるゝが宜しく候。御得意の酒は、極めて少量を用ゐ給へ、度過さば毒、殊に旅は御用心が何よりにて候。吳々も御歸家の節は、金玉滿囊書肆相爭うて上木申し込み申すべく候。時下向暑、隨分御氣付けられ度、一筆御送辭と致し候。敬具。

◎返信に曰く。御書の通り、如何にも聞え惡しき旅思ひ立ち申し候も、例の罪ほろぼしの爲には非ず、是も煙霞の爲に過ぎず候。四國には細々しき地理書なきゆゑ、缺點を補へかしの御忠告、小生も固より期する所に御座候も、一ケ月や二ケ月の旅にして、何として之を遂げ得申すべき。言ふべくして、行ひがたき事に御

候。もと尾山城と云ひしに、前田氏七尾より移りし際、金澤と改めしに候。

○

兼六公園は、岡山の後樂と水戸の偕樂と三公園の一、自然と人工と相待ち、この好林泉を成せるにて而も舊蹟少なからず候。尾山神社は、藩祖を祀れる別格官幣社。境内は四時の

座候はん。只地の便否や、路の遠近により、訪ふことに甲乙はつけまじき考へ、是は必ず實行する筈にござ候。是迄、人の訪ひし事の多きは、便利よき讃岐伊豫の二國にして、多少の記も世に傳へられ居り候も、最も少なきは土佐にして、有るも如何はしきもの多く候へば、勞多くして功少なきを構はずに、今度の行及高知縣下に重きを置き候。是等は小生の特長に候はんも、處世上よりすれば大短所、碌々として今日に至るも、斯樣なひねくれ心もつ故に候。先づ阿波より筆執り初め、南海岸を西へ〳〵と、折々は北へ寄り、それより北海岸を經て歸る筈、道後にては垢洗ひ申すべく候。

歩に宜しく候

○

卯辰山は、謙信が壘を築きし舊地、金澤城と相對すれば、俗に向山とも申すに候。山上は山海の展望に富み、卯辰神社、招魂社ござ候。

高岡より

富山と併稱せらるゝ越中の都會、米穀の取引盛んに之れ有

花の旅雅箋

大阪の俗、厭はしとの念、案のでう東寺の塔に迎へられて消え、畫中に入れる感じ致し候。見渡せば、花曇せる方の空には、眠れるに似し山の姿優しう、春樹烟りておぼろに、參差として隱見する祠宇樓臺、僕はこの樣をば、繪より外に見し事之れなく、初めて京は佳麗の地たるを悟り申し候。殊に神戸の激變に驚き、大阪の煤烟繁きを厭ひし僕、尚更の儀と察したまはれ。

景や情、其日〳〵に御便すべしとは、出立の時の御約束に候へども、習はぬお經は讀まれぬとの喩、自由に廻

り且つ銅器を産出するに候。市中の家屋宏壯なるは申すにや及ぶべき。水陸の運輸便に候。さて、觀るべきものは公園其他の社寺に候。舊城址は、即ち今の公園城は慶長年間、前田利長の築きしもの

伏木より

北海の要津、本邦輸出港の一に班し、船舶輻湊致し、その繁華思ひやられ候。大字古府には國府の跡ござ候。其處には勝興寺之れ有り候。古歌に名高き有磯海は伏木より西北一里半ばかり、太田宮田に亘る海濱の稱に候。

富山より

北陸は、金澤、新潟に亞ぐの都會に之れ有り、前田氏の舊城

○遊覽

り難き筆に候へば、足らぬ處は例の御推量願はしく候。京都驛に隣する兩本願寺は、珠數爪繰る道者に預け、直に東山へと電車驅り申し候。

第一信　圓山にて

四條橋より東すれば直に祇園神社、八阪神社と申すは此處。兩側は所謂祇園町、有名なる花街にして、物言ふ花四時老いやらぬ名所に之れ有り、由良之助の古蹟も南側に殘り居るに候。角行燈に、一力と書せるが其處。

八阪社を左にして登れば、夜櫻に名高き一本櫻ござ候も、花は既に散りて葉のみ繁く、低れし枝は幾萬本とも其數知られず、地を拂ふさまは、何かなしに柳としか思はれ申さず候。北に行かば知恩院、直に登らば圓山公園に之れ有り、花は七分に他の樹三分、曲々と通ずる路の左右には、數多の旗亭高下として聳え、絲の音も折々流れて聞ゆるに候。

正午には少し早かりしも、誰かが言ひ出し、晝飯命ずる事に致し、成るべく小綺麗にして廉なる處と思ひ、終に飛込み申し候。これは、旅の恥かきずてと申す乞食根性には非ず、時間を要せずして輕便にとの主義取りたる次第に御座候。つれの友ども酌む間に、さら〳〵此一信認め、御約束果したる心得に御座候。

邑に候。市内には、風る觀るべきの社寺ござ候。中にも神通橋は、臥龍に似、雄壯に候。往時は、六十四隻の舟を連れ眞の舟橋なりし由に聞き申し候。

日石寺

大岩村大字茗荷谷に在る眞言の名刹、境内には、勝跡靈區かず知らず、堂宇は北の方、卽ち左すれば馬場、知恩院の山門仰がれ申し候目につき易きはうこん櫻に候。今し花の盛り、妓を携ふる謝安の仲間も、赤毛布の道者連も、洋杖ふり廻す書生達も、一時に集ひし風情、子供の爲にあるかるゝ申す夫婦は先づ少なく候。

第二信　鑛泉場にて

知恩院は、圓山の北に隣り、華頂山の麓を占むる名刹洛東隨一と申すべく、淨土宗鎭西派の總本山に御座候。寺樓は宏壯にして、廊下の鶯張、襖の繪の拔雀、八方睨の猫は最も名高く候。大釣鐘は、申す丈野暮の筆に候申す迄もなく莊嚴にして、境と相副ひ居り申すに候。

七尾より

彼の霜滿軍營秋氣清と、謙信が歌ひしは卽ち此處に候。北陸有數の良港、且つ能登半島人文の中心とも申すべき地に候能登島とて、七尾灣に横はる島の周圍には、奇勝甚だ多けれはん。間道より再び圓山の上手に出で、濡れて紅葉の長樂寺と申さるゝ寺をも訪ひ、安養寺をも訪ひ、賴山陽其他一家の墓にも詣で、花陰に碑文をも讀み申し候。

又何日來るか知るべからずとの議論より、鑛泉に入浴試み、全市七分を脚下に見、苦茗啜り申し候。月仙子は得意の瓢、內證にて行られ居りしが、可笑しさに堪へ申さず候ひき。此處の小婢に、知恩院の傘は、如何にと問はれて、初めて心付きしも今は返しならず。思ひきり申し候。圓山と申すは、往昔圓山安養寺と申す精舍ありしに因る名、序に申し添へおき候。此邊、一掬の土、一片の石も、多少の歷史有し居るも、歸後に讓りおき候。

ば、舟遊して筆を弄するに宜しく候。

和倉より

七尾より二里半餘の溫泉場、能登島に對し、山水の景美しき地、啻に靈泉の疾を醫するに止まらざる處に御座候。

高田より

越後屈指の都邑、榊原氏十五萬石の舊來邑、商業も潑活にして人烟稠密、兵營もござ候。地は信州に近く、雪は有名なるものにて、この下に高田町あり、と標を立つる事あるやに聞き申し候。

直江津より

地は海陸交通の要衝を占め居り、信濃の爲には咽とも申すべき處に候。只大船の

第三信　清水にて

東山見物は、大抵のものが此處を最後と致す由。圓山より清水迄、一々訪はゞ限りもなき事、殊に飛脚見たやうな旅行、急がぬ花の旅、暮るゝ處にてと申す風流人氣取られず候。併し君、靈山へは急ぎ足して登り、木戸公夫婦の墓を初め、維新の前後、國事に力盡されし諸士の墓をも弔ひ申し候。又、此處は極めて眺望に富み、京の町を春烟縹緲の中に望み、そのはてには、西北の連山をも指點すべく、加茂川の素練、遠くは桂川の流れ、淀山崎の白帆をも、手に取らるゝこと、畫に異ならざるに候。

清水寺は、音羽山成就院と號し、洛東第一の靈場に之れ有り、其名は遠近に鳴り渡り居るに候。清水阪よりし其境内に入らんとする處に、忠僕茶屋ござ候。誰も知る彼の勤王僧月照上人の從僕が營みし名殘、文士西村天囚氏の記ござ候。

清水の舞臺と申すは、懸崖に架したる樓屋の稱に之れ有り、下は餘り高からず候も、花群り咲きて人は香雲に坐するのおもひ致すに候。欄に倚りて見渡せば、北は斜に京の市街を望み、遠く雲烟隔てゝ夕陽淡き邊に、淡路島見ゆる事、名所案内に書きあれど今日は見え申さず。金剛山はかすかに、河内の連山を凌ぎて、天際に聳ゆる

碇泊に便ならざるが缺點と申すべく候。旅館などの宏壯なる北陸第一位に居るべき乎と存じ候。

柏崎より

維新前は桑名藩の領に之れ有り、明治の初年には、柏崎縣を置かれしに候。陸には汽車、海には汽船往來共、鑛油精製に名高く候。又、訪ふべきの社寺多く候

長岡より

新潟に亞ぐの都會、もと長尾爲景の居城地、近世には牧野氏の采邑たりしに候。地は信濃川平野の中樞に位し、水陸共に交通便利に、鑛油業最も盛んに候。

新潟より

此處、封建時代の歴

いと床しう望まれ申し候。

楣間に掛けられし額の評、さては諸堂舍、諸緣起書かくは、初めて訪ひし僕の能くすべくも非ず、名所記御土產として呈すべき筈。彼の名高き瀑は、舞臺より東南に下りて得申し候。固より人工に成りて三條に落つるにて而も樋を傳うてにて候。貞柳が、

さら〳〵と音羽の櫻ちりつんつ
てんと三筋の瀧の白絲

と。嘲り得て妙と申すべく候。只此處等は極めて靜かにして、仰げば舞臺にて語る人々の聲、花を漏れて聞ゆるなど、是はたしかに俗とも申し難く候。

第四信　嵐山にて

嵐山には今日遊び申し候。此處ばかりは、繪に見たるよりも、聞きしよりも確かに勝りし名所、何とも評し樣之れ無く候。其山の姿と申し、水の麓遶れる態と申し、さては瀨となり淵となるさま、渡月橋の横ふさまと申し、川舟の往來する、茶店酒閣、場所柄だけか鄙しう見がたく候。花の多きは勿論に候も、松の木間にちらほらする處、又なく風情深く眺められ申すに候。筆の不足補はん爲め、寫眞十數枚、別便に付し御覽に入れおき候間、御落手下されたく候。

史を有せざるも、明暦の頃より漁民移住し土生田の里と呼ばれ一沙洲、遂に今日の都會を成したるに御座候。長崎や横濱と共に最も古き互市場に之れ有り、白山公園、日和山などは遊歩するに宜しく候

頼三樹の詩に、

柳梢眉月夜微濛
江入渠流曲々通
八百八樓涼似水

○遊覧

此處は、花に名高きのみに候はず、夏は納涼、秋は紅葉、冬は雪と申す調子に、四時共に景色に富む所との事にござ候。中にも花は甲と申すべく、朝は朝、晝は晝、夕は夕、雨は雨と各愛づべき景色、たしかに京都第一の勝地に候はん。まして附近には、名刹古蹟數限りなく候て、益此地をして靈ならしめ居り候。

有名なる大悲閣は、四五町の上流の左岸に之れ有り、其下には鑛泉場や、醉ふに宜しき旗亭など、碧流に枕みで客待つもの多く候。相訪ふには、舟よりもせられ、又花下を辿り、川に沿うて行かるゝに候が、こは渡月橋を西へ渡り後にすべく候。彼の

海府浦の勝

風景の雄大なる、眞に北越第一とも申すべき此處。舟にて探勝するに宜しく候。地は瀬波港より北のかた勝木に至る、直徑六里許の海べの稱にて候。

親不知より

新道開け居れば、

花の山二丁上れば大悲閣

との句碑は、船と山路よりとしたる人々、二足三足上りし左手に建てられ居り候。

此處等にては、川を大堰と呼ばれ候も、下は桂川に之れ有り、上流は保津川とて奇勝に名高く、丹波の龜岡より舟下すべく、躑躅咲く頃殊に宜しき由に候。尚、嵐山より泝りて、落合まで行かるゝ由、其間にも頗る勝あるとの事に候て、落合と申す處は、紅葉の名所の高尾よりする、清瀧川の注ぐ處と聞き申し候。

大悲閣千光寺にも題し、其下の旗亭にても酌み、とやかうする間に、永き春の日も暮に近く、期せし仁和寺の

北陸だより

往時の危險之れ無く而も夏の海、波さへ高からざるに候。そのさまは、之を古人の記に見るが宜しく候。只眺めは、固より凡ならず候。

佐渡より

兩津町は、佐渡東海岸の名邑、港を夷と申し、加茂湖の北に候。南は則ち湊町この二つを合せて兩津と申すに候。加茂湖は周回四里二十三町、夷潟、兩津潟とも申され、景色畫よりも佳なるに候。

○

相川は島中第一の繁華地、いもりよりもつと利くのが佐渡の土、と謠はれし金山の所在地。又、朱紫泥燒は名高く候。

○

眞野宮は、順德院の

○遊覽

櫻は見殘す事に致し、舟にて川下る相談一決、直に棹執らせ申し候。右仰げば滿山花白う、雪か雲かと疑はるゝ處、櫻谷と呼ぶ由に候。左は小丘にして稚松疎に、處々に花あり、必ずしも棄つべきの景には候はず。緩う流る樣なれども舟疾く去り、千鳥淵、戸無瀨瀑も後に相成り、橋の上手に舟は着き申し候。西に對すれば、全山の花おぼろに、彌夕の幕と相成り、何れの寺々よりも疎鐘鳴り申すに候。

此に泊らんとの說出で候ひしも、大阪に約あればと僕一人異儀稱へ、直に電車にて五條に出で、更に大阪に夜電車試みん筈に候。夕飯する時間ぬすみて一筆。

第五信　大阪にて

名所古蹟なきに非ず候も、もと遊覽としての大阪とするは如何なものかと存じ候も、奈良へ往くさの中繼、一寸彼處此處、今日一日覗き廻り申し候。新町の夜櫻は時候過ぎ、花と云ふべき所は天滿の造幣局と櫻の宮、此處は恰も盛りに之れ有り、友人に案內してもらひ申し候。

造幣局の櫻は、今日限り通行禁止と申す處、先づ無難に見られ、淀川橋東に渡りて北し、櫻の宮の花訪ひ申し候。名のみ優しくして花は少なく候も、此處には不景氣の風は吹かず、命の洗濯する人々多く、俗と罵ればとて

○遊覽

御舊蹟、卽ち眞野御陵に候。申すも畏けれど、帝には孤島に二十二年のうき春秋を送らせ給ひ、黑木の御所に崩御したまひしに候。頃は、仁治三年九月十二日。

○國分寺は本島最古の精舍、眞野村の國分寺にござ候。堂宇は頗る觀るべく、什寶少なからず候。

○遊覽

何處の花見も大抵此の如きもの、罵る人が却て俗かと存じ候。歸るさには、舟にて下り申し候が、水を中にして望む、造幣局の花なか〳〵に宜しく、近うよりて棹にて花拂ひ候も、矢張遠見するが床しく、而も夕日に眺むる風流限りなく候。返り見れば、古城は粉壁鮮明に、古松の表に見え、是も亦畫中の趣、大阪とて詩景なきにも候はぬをと思はしめ候。僕を以て見るときは、詩にする人のなき乎と存じ候。

少々筆横に逸るゝ樣に御座候も、有る名所さへ毀つ大阪、自ら俗と呼びつ、或は呼ばるゝも屁とも思はず、困つたものに候はずや。櫻の宮に隣せる大長寺の移轉は、

中國だより

龜岡より

松平氏の舊城邑、天正年間には、彼の光秀居りし處に候。城址は市街の北に之有り、保津川の勝を探るには、此處よりするにて候。市街は稍繁華にして、諸街道の起點は之れ有り、鐵道もござ候。

鯉塚や小春治平の蹟をもなくし、夕陽丘には其半ばを崩して女學校を建つるなど、沙汰の限りと申すべく候。

櫻祠三月好繁華　櫛比ノ茶棚接ニ酒家一
孤棹水明カニ春入レル畫ニ　舟中飽マデ看ル夕陽ノ花

是れ舟中にての拙作に御座候。

第六信　奈良にて

もと、吉野までもと存じ候ひしも、少し花に後れしとの說も出で、歸宅急ぐとの說も出で、財布の腹減りとの說も出で候て、終に奈良にて切り上ぐる事となり、今日は奈良見物に暮し申し候。此地偲ばるゝは竹外の

○遊覽

保津川の奇勝

名高き保津川下りと申すは、亀岡より嵐山に至る迄の間を申すに候。山水の奇絶にして、舟子の舟を行るに妙なる、又他に之れ有るまじく、四時共に悪しからず候も、杜鵑花咲く頃尤も妙なりとの事に御座候。

園部より

船井郡唯一の繁華地小出氏二萬七千石の舊采地、生絲藺席の産地に之れ有り、一里餘の東に流るゝ保津川は、亀岡まで舟楫の便ござ候。

綾部より

山陰街道の驛に之れ有り、鐵道開通以來、生絲、綿、繭等

半空ニ湧出兩浮圖　更ニ有三伽藍ノ俯スル九衢ニ
十二帝陵低シテ不レ見ェ　黑風白雨滿ツ南都ニ

の二十八字にて候。當時二塔ありしと云ふも、東大寺の
は崩れ、獨り興福寺のもののみ、猿澤池に影落すに候。
祠宇寺樓は尙舊により、樹間に參差として聳え、今に往
時の盛を懷はしめ申し候。竹外翁をして今日に在らしめ
ば、此詩後半の歎なからしめ申すべく、明治中興以來、
何れの御陵も美事に修められ、み代の德は一區の奈良に
止まらず、臺灣さては朝鮮、滿州、樺太に迄も及び居る
今日に御座候。
聞き給へ、春日、若草の峰巒は東に翠屏を展べ、其麓
には名祠巨刹散在し、歩々懷古の念を深うするのみに候
はず、天然の佳景は應接に遑なからしむるに候。其俗人
としての訪ふべき地、京都に比すれば少なく、其規模も
亦小に、見物は一日にして足り申すべく候も、史家たる
眼よりすれば、遙かに京都の上に出で申すべく候。大和
は、皇祖建國の地と申す一事にても、其然るべきを知
られ申すべく候。中にも奈良は元明帝の和銅三年より桓
武帝の遷都に至る迄、すべて七朝、年を閲すること七十
有五、最も旺盛の時代たりしに候。我國に於ける文物技
藝の淵源は、實に此時に在るに候。故に山容水態、一樹
一石も、皆幾多の歴史を帶ぶる事に相成るに候。

の取引稍觀るべく、戸數一千餘にござ候由良川の上流は市街を遶り、夏の涼みによろしく、且つ鮎は名物。此處、もと九鬼氏の采邑に候。

福知山より

天田郡の中央に位する名邑、もと朽木氏三萬二千石の城下、山陰道且つ阪鶴鐵道線の要衝に之れ有り商工業稍盛んに候往年、全市水害を被りしも、年ふるまゝに、漸く舊觀に復し居り候。

篠山

もと青山氏の城下、中國街道の要衝にござ候。山間なれども商工業發達致し居り古來學事盛んに、鳳鳴義塾に出でし人材少なからず候。

花は大方散りし今日、到る處の眺め却て宜しく、名所と申す名所は殘さず探り盡し、夕暮に旗亭に腰おろし申し候。一つ二つ記したく候も、筆執らば是も彼もと申す事に相成るべく、今度は前記の小理窟のみにて御勘辨願はしく候。二三枚の寫眞、さては名物の何や彼や、畫の中に相求め、小包に托しおき候間、着次第御受取下さるべく、霰酒は小瓶持歸る筈に御座候。草々。

武田尾溫泉より

流石は詩筆に親しむ僕が一行、寶塚の新溫泉などには心傾けず、直に武田尾さして汽車驅り申し候。北するに隨うて山容自ら奇しく、境亦怪に、彌筆は忙しきに候。凡そ生瀨より武田尾に至るの間、幾重もの峰巒左右より相迫り、中には一道の碧溪通り、急流は矢を射るも同じく候。鐵道は、其右岸の下に曲々として通じ、トンネル又トンネル、瞬間に幾晝夜を成すの感じ致さるゝに候。その山の手を立てし如き處に於ては、仰ぐも其頂上を見難く、石壁只車窓に當り、苔氣は人を撲ち、雲は眼前に飛び、奔流は脚下に雷聲闘はすに候。

稍進めば天開け、兩山相別れて眺め佳に、人を喜ばしむるもの多く候も、汽車は猶徐々として相誡しめ進行するに候。仰げは、岩石纍々として頭上に掛り、年經し松

柏原より

古書には貝原と書したるも之れ有り、今に柏原をカイバラと申すに候。大阪と神戸と商取引多く、播磨路と但馬東街道との要驛に候。もと織田氏二萬石の城下、織田神社は其祖を祭れるに候。

舞鶴より

樹は枝奇しく、低れしたるもの、臥したるもの、聳ゆるも之れ有り、其狀たるや、龍の雲に出沒するにも似通ひ居り、又飲むものにも似通ひ居り候。すべて此邊の景色は、文人畫その儘とも申すべく候。

やがて武田尾にて候ひき。鐵道に沿うて進むこと二三町、溪上に徑開け、左に下りて得しは紅葉閣。地に從うて屋を構へ居る事とて、恰も五層樓の如くに相見え、その一層毎に庭之れ有るに候。地勢は、北に峰巒重疊して川は其中間を通じ、瀨あり、湍あり。川を隔てゝは、青山一桁南北に長く、嵐影直に欄干に落つるに候。其麓には温泉あり、側には温泉宿二軒あり、此方より假橋渡り

吳、佐世保などと共に、一足飛の都會戸數殆ど一萬、その港灣のよき、以て知らるべく候。もとは田邊と稱し、牧野氏の藩地なりしに候。又、細川幽齋の事は既に史に詳かに候。

宮津より

もと京極氏の城邑、縮緬は名高く、魚蝦の利も亦多く候。彼て行かるゝに候。

此方には、紅葉閣一戸に候も、内湯あれば對岸に渡るの要なく、且つ臥するも欄に倚るも、酌むも賦するも自由に御座候。況して地は浮世隔てし境、人は心合ひし友のみに候へば、酒は淡くとも肴はなくとも、隨分醉ふに不足これなく候を、規模は小なるも山水清く、日來の塵を洗ふに足るか嬉しく候。

雨後の山色紫翠堆く、夕陽の影は涼しく欄干の前に流れ候。されど、興彌深く、未だ歸を云ふもの誰一人とてなく、行れ〳〵と呼ぶもののみにて、終に燭を命ずるに至り申し候。詩酒に深き先生達は、流石に違うたも

の橋立は相距る一里餘、舟雇うて白砂に歩を試み、成相山にも登り候。橋立や文殊の寫眞は、別便に附しおき候。

豐岡

もと京極氏の采地に之れ有り、城崎川の西岸なる小都會にござ候。地は四通八達鐵道もござ候。市街の内外には社寺多く境内は何れも眺望に富み居り候。

城崎より

此處名高き溫泉場、附近には勝區多く候へば、浴後の散歩にも亦宜しく、無病の者と雖も、心の底を洗ふに惡しからぬ處にござ候。

○玄武洞にも遊び、細かに洞中の勝を探りのと御感心有るや、如何に。一行は、八時の汽車にと覺悟し、尙も酌むあり、臥するあり、彌以て壺中の天なるに候。僕は不圖眼を覺し候へば、欄外にそゝぐ急雨の音如何にせばやと存ずれば、溪樹の梢に星の影輝き、闇なれども空清う、尙青山の影を認むべく候。今しも雨と聽きしは、瀨の音の淙々たりしに候。波の音は、晝騷がしく候て夜は靜かに、谷川の水音は、晝靜かにして夜騷がしきものに候を、海邊に人となりし僕は、この譯知らずして失敗取りしに候ひき。やがて八時近う相成り候に付一燈に導かれて驛に出で、今朝來るさに見し奇景をば暗中に過し、再び大阪の人と相成り申し候。

笠置より

伊賀は上野よりの歸るさ、笠置山の勝探り盡し申し候。往年、汽車の窓より仰ぎし、行宮遺址の大石碑は、夏の木立に遮られて見え申さず、枝きり下して此處通る諸人に拜さしめばやと存じ候。

笠置山の古き歷史や寺の緣起は兎も角もの事、元弘の亂には後醍醐天皇當山に行宮をおき給ひしより、天下の人悉く懷古の涙を灑ぐ所となりしにて、彼の楠正成が帝の御召に應じ候て、義兵を擧げしは實に此時の事にて候はずや。

例の日記に上し申し候。一名石柱洞又は蜂巣窟と申すに候

出石

交通不便なるも山中の小繁華地、仙石氏三萬石の舊城下に候宗鏡寺は巨刹として觀るべく、出石神社の境内は、四時の花卉に富み、彌生の櫻殊に美觀と評すべく賽人多く候。

鷹野濱より

城崎溫泉に入湯の序に遊ぶに宜しき處、津井山より海に沿うて訪ふべく、懸岸と島々の眺め畫よりも宜しき處に候。

鳥取より

此處、山陰道中一二を爭ふの都會、もと池田氏の大藩、社寺の觀るべきもの多く

○遊覽

山は直立八百五十尺、登路八町、山中の古蹟を探るには七町餘の行程に候へば、誰人にても遂げ易く、先づ追手橋より右に折れ、標石に導かれて登るに候。下の堂を過ぐれば上の堂。此處、もと一の木戸にして、足助重範が弓勢を示せし處に候。次に名切石とて元弘の亂に、忠死者の姓名を勒しあると申すも、震災の爲に顚覆して其表を見られ申さず候。やがて寺に達し申し候。

三大石は、第一に訪ふの勝、藥師石は高さ四十尺、幅三十一尺。相隣する文珠石は高さ二十二尺、幅十六尺。彌勒石は高五十二尺、幅四十二尺。何れも其面に佛像を刻し、之を內に籠め候て、大伽藍ありしと申すも、元弘の兵火に罹りて燒け、その像の形さへおぼろに相成り居るに候が、實に當時は此巨石が本尊なりしに候。其下には古びし本堂及び十三塔の小さきもの建てられ居り候。眞上は行宮の遺跡に之れ有り候。

尙續いて金胎兩部石、千手窟、虛空藏石、胎內寶、太皷石など御座候。相對して彼方の遙かには、千手瀧見ゆるに候。今に尙、慨慨に堪へざるは、眞下の谷より陶山の賊等が木の根や葛によぢ、終に皇居を襲ひし事に之れ有り、天險と賴みし爲め、南朝勢は却て其虛に乘ぜられしに候。

次で搖ぎ石、平等石、冠掛松、貝吹岩などの勝尋ね候

三十二萬石の名殘り何物にも知らるゝに候。鐵道開けてより最も繁昌せる由に候社寺の觀るべきが中にも、最勝院には如意山八勝の目これ有り、臥龍松の碑もござ候。

稲葉山

今かへりこんの一首にて、名高き山は是にて候。一に因幡にも作り、又宇倍山とも申すに候。附近には、國幣中社宇倍神社これ有り、境内は四時の遊賞によろしく候。

船上山

歴史上著名の山、その事は申す迄もなき儀にて、天皇屋敷と申す地こそ、後醍醐帝の御遺蹟に候。山川より登り一里半

て、やがて皇居の跡に參り申し候。地は山の絶頂に之れ有り、石階を攀づれば玉垣を遶らし、皇跡の遺趾たるを標せられ居り候。恰も彌勒石上に相當り居るに候。傍に竹田宮恒久王殿下御手栽に係る松竹梅ござ候。明治三十九年六月御登山、凱旋紀念の御爲に植ゑ給ひしと申すに候。操正しき雪中の三友、いや榮えん事を是祈りしに候

笠置石は、高さ五尺、周圍二十尺餘。むかし天武帝御笠を置かせ給ひしと申す石にして、文珠石の戴く所、而も其端に在るに候。當時の事物語らば、紙の五枚十枚にては盡し難く候へば、此には略し申し候。其他記する勝も興も、外にも少々ござ候へど、是も亦略し申し候。温泉に一浴の上、此筆試みて斯く。

三尾の秋尋ねて

高尾、槇尾、栂尾は古來紅葉の名所、今日漸く訪ひ申し候。而も大阪よりにて候。先づ車停めしは高尾に之れ有り候。紅葉茶屋に憩へば、人は錦雲に坐するに異ならず崖の下は清瀧川、ひゞきのみ淙々として聞え申すに候。山徑下りて小橋渡り、登々たる石階終れば、神護寺の山門を得候。門内は地廣く、鐘樓、藥師堂、金堂、大師堂並び建ち、金碧光らざるも尚莊嚴にござ候。又、右に護王神社の舊祠これ有り、山中には清麿公の御墓、左して

米子より

伯州第一の都會、海陸何れも至便の地、中海の風光の佳は云ふに及ばず、醉ふべきの旗亭も亦少なからず候。

境より

雲伯二州に於ける貨物の集散地、山陰唯一の要港に之れ有り日本海沿岸にても亦樞要の航路に候。港内は水深く、大船巨舶も直に岸に繫ぎ得べく候。

夜見ケ濱

世に大天橋と申さるるは此處、沙洲突出すること五里餘、米子は其咽喉を扼し境はその最端に位致し居り、一大詩景、僕等が筆には其眞を寫し難く候。

の山上には、性仁法親王の御陵ござ候。楓にて名高き地藏院址は、最も西にして地稍高く、崖下には蜀錦を晒すが如く、碧溪水いと〻明んに詩なかる可らざるの地に御座候。只遊人の俗なるに驚き申し候。

槇尾訪ふには、再び紅葉茶屋の崖下に來り、川に沿うて北東するに候。此處は、殆ど楓なく、西明寺は小橋渡りて訪ふに候。境靜かにして苔深く、人間一點の塵を留めず、樹亦みどりのもの多く、紅葉に醉ひしを醒すに足り申すに候。

栂尾は四五町の上流にして、周山街道よりするにて候橋あり、極めて古雅、白雲橋と題せられ居り候。高尾槇尾は取るに足らざれども、此處のは眞の金銅の擬寶珠、欄干は幾年の露霜に打たれて古色掬すべく、泉石の妙なる亦、二橋の附近に見ざる處に御座候。而も楓葉天を成し、眞に名所の實を擧げ居るに候。街道より左に登れば山門の跡、進めば寂びし金堂、上手に石水院址、其下に佛足石、少しく進めば明惠上人の廟ござ候。此邊、苔は足を沒して雲の如く、森々たる境に候。

下れば高山寺、名のみの精舍にござ候。門内に石水院相接して本坊ござ候。石水院は、後鳥羽上皇の賜ふ所と申し、加茂石水院を移せるもの。現地には、明治に至りて移せる由に聞き申し候。

松江

名既に風流、宍道湖も中海も好風景、市街は繁華にして銷金窩も之れ有り、名祠巨刹の觀るべきものも亦多く候。此處、松平氏の舊城下にてござ候。

美保關より

國幣中社美保神社の鎭座地として名高く且つ國内の良港邑にて候。西南には、夜見ケ濱の松林を眺め景致限りなき處、隨分詩酒によき地に候

杵築より

出雲大社の鎭座地戸數は一千六百餘に之れ有り、全市大社へ參詣客の爲に衣食する由に候。大社は、たゞ〳〵有難さ身にしむのみ、

街道の右は水清く流れ、臨むに五色の楓葉多く、殊に眺め開けし處。進めば三階家あり、三層の構造にして眺望宜しく、他に家なければ溪山を獨占致し居るに候。相酌む客は見受け候はざれど、勝手元にては、旅人も道者も馬子も、共に兵粮使ふべき輕便の旗亭、僕も亦此處にて行り申し候。

此附近には烏帽子岩、夫婦橋と夫婦岩、鏡石、馬石、鞍石などの勝これ有り候。明惠上人の袈裟掛松は、何事ぞ、十七八年前に斧斤の災に罹り、今は名のみ殘り居るに候。再び白雲橋のほとりに徘徊し、終に見返りがちに歸途急ぎ申し候。一茶店にて。

碓氷嶺の茶屋にて

今し嶺に立てるは、僕にて候。字を峠町と申し、長野縣に屬するもの二三軒、他の十餘軒は群馬縣に屬し居り、熊野神社の鳥居は、中央に立てられ居り候。本殿は石階の上に之れ有り、上武平野を見晴し、前面には妙義山奇しくも聳え、尖岩の亂立するは、双手の指を立てしに異ならず候。左には赤城、榛名の山々、雲烟模糊の邊へ見ゆるに候。

眼下は即ち千溪萬谷、時候少し後れ候も、尙紅葉燃えんとし、其規模の廣大なる、流石は名所に恥ぢず候。茶

社頭のさま、筆に上すも如何はしく候へば、今暫く略し申すべく候。

津和野より

古名は三本松、もと龜井氏の城下にして濱田に亞ぐの都會、山間稀に見る繁華に之れ有り、永明寺は相訪ふの價値ござ候

濱田より

戸數一千餘、製紙業盛んに、魚鰓の利も亦多き地、もと松平氏六萬石の城下、相棲したる外浦港は船舶の出入盛んに候

斷魚溪

俗に魚斷と申す勝地山水の景に富むも人知る稀に、只大町桂月氏の記に其詳細を知られ申すに候。野田氏は、此處の爲に

屋の裏手は實に萬仞の懸崖、とても其下を覗き得べきに非ず候。箕面、高尾、嵐山、牛瀧の如く、溪水に沿うて眺め難く候も、嶺より俯看する、又格別の景、眞のさまは僕が筆にて寫す、思ひも寄らぬ事にござ候。

碓氷川の源泉は、東北の崖下にござ候。

方形にして八疊敷ばかり、一は四疊半敷ばかり、二段になりて重なり居り候。今朝、信州路よりせる僕、少憩致し候上、舊道辿り候て、直に山下に下り申す筈に候。路絶えたらんとの噂に候も、例の好奇心に驅られ、實行せんとどつさり此處の茶屋にて腹こしらへ居り候。紅葉があるのに雪が降るとか、茶屋には最早、炬燵開き居るに候。

寒霞溪より附十二景

久しく夢馳せし寒霞溪、漸う今度遊び申し候て、只今海邊の旅舍に筆執らんとす所に御座候。所在地は小豆島、應神帝の遊び給ひし舊蹟に之れ有り、上陸地點の草加部灣は、一に內海灣とも申され、天武帝第一皇子草壁王の御名代地と定められし歷史を有するに候。又、明治天皇は、明治二十三年四月、吳と佐世保との兩軍港へ行幸の途次、此處へ御寄泊在らせられし事もござ候。僕が遊びし日は天氣宜しく、島の山々影を晴波に浸し候て、風帆往來、漁歌斷續、先以て佳景に醉ひ申し候。僕

道路開くなど致され私財を盡されし由に聞き候。

西郷より

隱岐唯一の都會、住民は土地がら商漁相半ばし、市街は稍繁華にござ候。船舶は北海より長崎、下之關、大阪等に航行するもの相寄り、交通は便利と申すべく、鰯は名産に候。

等は既に十二景探り候に付、今こそ御通信致すべく候。

第一　通天窓

雄々しく一峰聳え、其中腹に穴あり候。こは自然に穿たれし圓形の窓に之れ有り、遙かに碧空を見られ申すに候先づ草壁村大字上村よりすべく、爪先上りの路を進むこと十二町許、溪橋人を邀ふに候が、一簇の紅葉を眺めつつ、此橋を過ぐれば、忽ち双眸に入り來るに候。

第二　紅雲亭

風流なる一亭に之れ有り、草葺にして竹の欄干、遊人の憩ふに宜しき處に御座候。附近には紅葉多く、眞に紅雲の中に坐するに異ならず候。彼の通天窓を見て過ぎ候へば、直に索麵溪を得候。此處、溪廣く候はねど、一面の平石底を成し、幾條もの水そが上を走るに候が、其狀絹絲を流すに異ならず、是れ俗なれども索麵の名を得たるものに候はん。紅葉の相映ずる、眞に唐紅に水くぐるとはの趣これ有り候。

第三　錦屏風

錦屏風の實を知るには、新霜木葉を染むる晩秋ならざれは叶はぬに候。今遊は實に紅葉の見頃に之れ有り候ひし

姫路より

嗚呼、此處豐太閤の出世の首途地、五層の天守閣は今も尙九天に聳え、日々幾千の旅人に仰がるゝに候。太閤の事は、近古史談にも見え居るに候。地は岡山廣島に亞ぐの繁華に候。

○

舞子、明石の勝は日記にのぼしおき候へ

中國だより

ば、歸後ゆる〳〵御覽願ふべく候。

阿彌陀より

石の寶殿ば播磨名所中の奇觀、觀濤處にも立ち、灘や島々の景を領し候。此處花多く、必ず訪ふべき地に候ぞ。

圓敎寺より

播磨第一の巨刹、西國三十三所第二十七番の靈場にして、書寫山と申すは此處。境内には、名蹟多く一々記し難く候。

白國より

梅に名高きは此處、附近には白國神社、國分寺、廣峰神社、隨願寺、芭蕉翁簑塚風羅堂等の訪ふべきかござ候。

網干より

中國だより

かば、歎賞措く能はざりしに候。紅雲亭より二三十歩、左顧すれば畫屏目につき申し候。是ぞ一面の絶壁にして青苔紅葉、自然に畫を成すにて、最も偉觀と評して宜しきものに御座候。

第四　老杉洞

老杉茂りて高く、枝は雲を宿し、境最も幽にして、神仙の栖むかと迄疑はるゝ此處、削り成されし峭壁これ有り候て、其腹に一洞門ござ候。紅葉の觀なく候も、地の森〳〵たる、人に冷氣を感ぜしむるに候。錦屏風よりすれば少しく北に方り居り候。

第五　蟾蜍巖

此巖、申す迄もなく、形によりての名稱にて候。進み候へば、路の左右に各巨岩ござ候。その太さ八九尺許、兩眼の突起するさま、背に斑點あるさま、癒眞に迫り居り候て、左のは脚を張りて天を仰ぎ居り、右に比すれば少しく小さきに候。

第六　玉筍峰

すべて此邊、石峰亂れ峙つに候が、中にも傑出のものは是にて候。山路を辿り來て右を眺め候へば、尖くも天を

小繁華の一港邑、揖保川口に市街を成し上流には龍野、山崎の名邑あり、爲に往昔の面目を維持致し居るに候。

龍野より

脇阪氏の舊城下、醬油と鮎とは名高く、四周には、訪ふに足るの社寺少なからず、聚遠亭は眺望富み山海を手にすべく候。

赤穗より

四十七義士にて名高き此處、義士に關する古蹟少なからず、鹽は名産に候。彼の大石櫻は、之を城址に訪ふべく候。

舟阪山

此山、山陽第一の天險と申され、元弘の昔、備後三郎高德が遺蹟。今はトンネルうするものを、空層洞と名づく。右層に横斷の紋五つあり、刻畫の如し。左屏は疊折して立ち、空處に當りて石筍三株を見る。形容各異なり。とござ候が、此記寔錄にて候。畫帖石より一町餘、此處も亦偉觀に候。

第九　荷葉嶽

此嶽、登山路の北に訪ふべく、名こそ嶽と申し候も、其實一巨岩に之れ有り、面には龜裂縱横、恰も荷葉の皺を成すに候。それに蔦蘿まとひ、秋色殊に美しく候。皺とは畫法にて、峯巒層纍の處を擬せるもの。別に、披麻荷葉闘髏の名もござ候。序なれば斯くは一言。

刺さんとするがござ候。その筍と申さんよりは、寧ち劍植てしとも評すべく候。

第七　畫帖石

この石の名、無理に付けしもの丶樣に御座候も、似し點なきにも非ず。是は登る途中の左に得申し候が、其岩のさま、疊んで帖を成す如くに候。若し之を繰る事を得ば如何なる景出づべき乎を想はしめ申し候。

第八　層雲壇

依田學海翁の小品に、大石屏を左右に植て、其中を空し

之れ有り、西麓は三石驛にて候。

津山より

山陽にて海知らぬ美作第一の都會、曾ては北條縣を置かれし地。城址は卽ち公園竹樹泉石、歩を致すに宜しく候。備前の和氣まで、津山川よりして下られ申すに候。名産は雲齋織、足袋、初雪、宮川漬等に候。

院庄より

後醍醐天皇隱岐へ御遷幸の際、鳳輦止めさせられし御遺蹟、彼の高德が櫻樹に題せしは卽ち此處、今し作樂神社ござ候。奉祀するは天皇にして、高德を配祀す。

岡山より

池田公三十萬石の舊

第十　帽子岩

此岩も亦、その形によりて名を得しに候。荷葉嶽より少しく東北に進み、初めて見たるに候。幽谷より碧落に向ふ二基の石筍、高さは何れも十數丈、其尖端には更に巨石を戴き居り、恰も冠して立つものゝ如くに候。而も矮樹雜生して髮と相成り居り一しほ奇觀を呈するに候。呼びて帽子岩とする、宜なる哉にて候。

第十一　女羅石

更に少しく登り、路の岐るゝ逢ひ申し候。左して得たるは女羅石、時しも晩秋に候へば、名を得し紅葉轉燃えん計なるに、この女羅石のみ濃綠滴るゝが如く、恰も貞女の操を持するものゝ如くに候。再び歩を返して、右の路を攀づ。此處ぞ所謂鈎懸、鐵鎖に身を托すべき處、昔の應神帝の御遺蹟に候。今の名の寒霞溪と云ふも、皆この鈎懸に、音近きにより雅なる字面を選びての稱に候。

第十二　四望頂

初時雨猿も小蓑をほしげなり。とは芭蕉の句、而も此處にての詠、句碑建てられ居り候。憐れ山上の眺め、眞に千里一目、島の山々は申す迄もなく、西には諸群島、南

城下、人口殆ど十萬廣島の甲乙を爭ふ大都會、名祠巨刹の觀るべきもの多く、彼の日本三公園と稱せらるゝ後樂園には是非遊ばざるを得ざるの地、其林泉の閑雅なる、一々筆に致しがたく、能文の士をして來らしめば能く一卷の書を成し得べく、流石に其名に愧ぢぬ園にて候。

臥龍松

名高き此松、明德三年に栽ゑられしもの幹圍三抱、枝葉の延長東西二十一丈、南北十六丈、高さ一丈五尺、碧雲地に布くかと疑はるゝに候。所在地は和氣郡香登村大字大内に候。

倉敷より

兒島半島の咽喉に位

には阿讃の山々、阪手の諸部落手に取るべく候。今日しも快晴の秋、瀨戸内海を隔てゝは、山陽一帶の連山縹緲として眼に入るに候。古來、十五ケ城を望むとの稱もござ候。精しうは、紀行にて御承知願ふべく候。

此上は、西廻り路取りて訪ひしに候。歸路は東廻り路取りしも、險にして勝少なく、龜岩、燈籠岩、石門、恩山寺、二見岩等之れ有り候も、前に探り來し諸勝に比べ候はん乎、物のかずにも入り申さず候。只聊か奇とも評すべきは、石門のみに御座候。尙、五歩に觀を改め、十歩に趣を異にする、既に賞すべき勝に候を、此處は一歩一景、變化自在に候も、只筆の副はぬが遺憾に候。

妙義町にて

積年の希望、漸く二日かゝりて相濟し、第一に金洞、第二に金鷄、第三に白雲の勝探り盡し候。この三峰をば稱し、妙義山と申すに候が、何れも尖岩嶮嶮として天を刺し居り、汽車よりも其雄々しきさま望まるゝに候。

七曲坂に至れば大黑、筆頭、子持岩を見る。又、鷲ケ岩、風穴もござ候。是等は登る左手にして金鷄に屬するものに候。中央の凹みには一本杉ござ候。此處、金洞と金鷄との岐るゝ處。やがて其處に達すれば、眞上に燈籠岩、杉の傍には鳥居の兩柱の朽根ござ候。この三つをば

する小都會、海陸共に至便、宇野を終點とする鐵道通過致し又國道下津井に通じ居り候。

高松より

名高き水攻の古蹟探り、清水宗治一統の苦戰をしのび申し候今し僅かに一草庵を存し、八幡山には秀吉が腰掛せし腰掛松ござ候。

併せ、燈鳥杉と申すに候。なぞのやうなる稱呼に候。妙義より、行程約一里。

五色山と申さるゝは、金洞、白雲、黑瀧、赤城、榛名五山の稱。黑瀧は西南遙かの空に聳え居り、妙義の敵とも申すべく、奇岩のさま窺はれ、且つ樹木多き山のやうに望まれ申し候。赤城と榛名とは、正反對の東北に相並び、尋常の山ならぬを知られ候。榛名は春にかよはせ青を意味するかと存ぜられ候。眼を右に轉じて仰げば夫婦岩、媒妁岩、惠美須岩等これ有り候も、評するに足る價値あらず候。少しく進めば、菅相丞硯水あり、二間半餘の岩面の上方に水湛ふるものゝ稱にござ候。

豪溪より

奇岩にて名高き處、岡山より七里半、池田村尖粟なる槇谷川の流域に候。大岩石の中央に、天柱の二大字を刻す、所謂摩崖碑、備中第一と稱し候も、日本にても第二流の勝に落ちざるべく候。

玉島より

屏風岩とは、硯水の左より上手に峙てる一面の絶壁の名、六曲の屏風展べしに似たるよりの稱。やがて右して山に入り、落葉しげき荊棘を分け入ること一町餘、忽ち雲を扉に代へし風情の石門を得候。是ぞ第一石門にて、高さ九丈、幅八丈、その總體より申さば、共に十丈の上に出づべく候。此洞門より月を望むに宜しと申すに候が實に然ならん、遙かに常州なる筑波加波の二山を、雲烟髣髴の外に望まれ候。而も金鷄山の凹處よりにて候。

第二石門は、第一石門の數十歩の上に位し、高さは四丈、幅一丈五尺、洞は弦月形を成すに候。鐵鎖にすがり横行の姿勢にて攀づる處を、蟹の横這と申すに候。此に來

備中の小都邑、戸數一千二百餘、里見川には舟運之れ有り、港口は帆檣林立、汽車驛をも有り居り、交通至便に候。

鐘乳竇

古來文士仲間に喧傳さるゝ此處、上房郡水田村に訪ひ申し候洞中には一々その形によりて名を得たるもの之れ有り、奇もまた甚しく候。縣道より三町餘の處、訪ふに都合よき地に候。

高梁より

もと板倉氏の城下、明治以前は松山と稱せられ、汽車より見るも城壁北に仰がれ申すに候。元弘の頃は、高梁英光治せし所に候。

尾道より

るまでにマボロシ岩、綾戸、少し上手には鼓岩ござ候。其形稍似通ひ居り候。

大蠟小蠟と申すは、二基の石筍を申すに候。第二石門を通りぬけし處に聳え、極めて高く尖く候。通りぬくると申すも、其實は鐵鎖にすがり眞正面になり、岩を背合せになりて下るに候。この石門を恐るゝ人は、女路とて他に一條の山徑あり、第三石門に至らるゝに候。

第三石門は高さ八丈、幅一丈二尺、其形は圓く候。右に虎岩、やゝ下方に虛無僧岩ござ候。此岩の形最も眞に近く、松風は尺八の音に似通ふなど、殊に興多く候。位置は、二石筍より一町餘の上手に候て、半町餘は殊更に歩を枉げて訪ふに候。

第四石門は、程もなくして得たるにて、第一石門にも劣らぬ巨岩に候も、隆然として平地に起らず、只高處より突出して深谷に臨む處、稍奇とすべく候。洞の高さ八尺、幅九丈三尺、其形大牛の臥するに似たり。併し、第一石門に勝る處は、全山の勝を双眸に入れらるゝ事にござ候。そは岩の鼻先よりにて候。

岩の鼻先に至るには、もと容易の業に之れなく、十中の七八は大概見合はすべく候。石門の右腹を横さまに攀ぢ、一呼吸の間に前面に出で候へば、岩は上下の齶を開きし如く、後方に凹みて僅かに身を容るべく候。左右と

山陽道に於ける屈指の商區、市街は山崖により、高低と家を構へ、向島との中間は卽ち尾道瀨戸、港内も頗る繁華に、千光寺は名高く候。寺地は高見なれば、豫讃の峰巒をも手にせらるゝに候。

福山より

尾道に亞ぐの都邑、戸數五百餘、阿部氏の舊城下、市街は少しく海を隔つるも、潮水溝渠に通じて運漕に便す。城は西に存し、現在の公園は其舊地に候。

鞆津より

瀨戸内海の要津、保命酒に名高き一商區仙醉島は公園地に充てられ、沼名前神社福禪寺何れも勝景に富む。又此處は、

○遊覽

前は其底を知らざる高さ、心おぢ足戰き易く候。されど山中第一と呼ばるゝ甲斐之れ有り、右手に第一石門、第二石門、鼓岩、マボロシノ岩、大蠟小蠟の二石筍、此方の上方には虛無僧岩ござ候。虛無僧岩は、四石門より望みし時と形を異にし、恰も直立せる背後を示すに候が、深編笠のさま、肩と首との邊のさま、岩とも見難き程眞に迫り居るに候。

さて又左方は、下方一帶の絕壁は卽ち屏風岩、之に點綴せる蔦紅葉は、尙秋の名殘を留め候て、一しほの眺め添へしに候。搖ぎ岩は少し手前の上に聳え、恰も象鼻の如く、天を仰げる岩端に在るに候。大砲岩は、更に搖ぎ岩の上にして、巨砲の砲車に載せられしもの〻如く、而も砲門は一の遮るものなき西に向ひ、その位置最も妙にて候。蟻の戸渡と申すは、大砲岩の下手の凹處の稱にござ候。尙左の上手に續き、天狗の腰掛岩、天狗臺、龜岩等ござ候。龜岩は最北端にして、搖ぎ岩と相距る近き樣に候も、四五町にも及ぶべく、土臺は平扁なる岩にして是等の諸勝は、恰も障子を立てし上に排せられしに異ならざるに候。

更に得しは武尊岩、その百仞の谷に臨みし處を、武尊覗と申し、共に日本武尊の御遺蹟と傳へられ居り候。此處登るにも、一寸呼吸ござ候。一に黑田の泣岩と申され

神功皇后の御遺蹟。足利時代には、西國探題足利直冬の據りし處にござ候。

廣島より

大阪と同じく川多き都會、戸數二萬餘、一里餘の海岸なる宇品をも併せて市制を布く。もと淺野氏の城下、此の元祖とも申すべきは、毛利輝元其人にござ候。

○遊覽

清隆公遊ばれし折、あぶないと言はれしを、大袈裟に呼びしものとの事にござ候。頭上の天狗臺に達するには、更に一條の鐵鎖を攀づべく、攀ぢ終れば難所の難所に逢ふにて候。そは山峽と申すに候。

山峽とは、一本橋とも申すべき岩、幅は一尺にも足らずして反り、懸崖と懸崖とに架せられ居るものに候。兩側は無論底測り知られぬ谷、這ふが如く、立つが如く、怪しき姿勢にて漸く渡り申したるに候。渡れば卽ち天狗臺にて、四疊半敷ばかりの大磐石、比較的に廣く候も、坐して談ずる易く、立ちて舞ふは難んずる場所と申すべく候。やがて龜岩、胎内潜をも實行し、最端に立ちては

市の内外には、公園を第一に、觀るべき社寺少なからず候。

御手洗より

大崎下島の東端なる港邑にして、酒樓には絲竹湧くなど、極風流の地、西方十餘町には大長の桃林ござ候。

吳市

此處、第二鎭守府の

○遊覽

罩丸縮み上り申し候。

再び山峽を渡り返し、南に向うて岩の背を下るに候が危嶮言ふばかりなく候。兩岩相逼り、僅かに身を横さまにして通ずる處を、天狗の鬚摩と申すに候。天狗のお鏡と呼ぶ岩は、一大深谷を隔てし東方、高き〳〵絶壁の上に轉げ居るに候。彼の屏風岩の上手に方り居るに候。附近をば天狗の御所、天狗のお花畑など申す由。

更に進めば天狗の腰掛岩、次に得しは大砲岩。その基部は殆ど六尺に近く、手をうち掛け足を宙にせずば、其背に立ち難く候。辛うじて立ち見れば、長さは七八間も之れ有るべく、五尺餘の岩根を除くの外、斜に深谷に差

所在地、もと漁商雜居の小市街、今は卽ち二萬餘の都會、海田市よりは鐵道來り流石は軍港とうなづかれ候。

吉田より

高田郡の名邑、毛利氏の故鄕とも云ふべき地、輝元廣島に移りしより、淋しきながらも、山間の小都會として來れるに候

出居るに候。南端には搖ぎ岩あり、遙かの下方に見え居り候。されど、大砲岩の側なる蟻の戸渡越えずんば行かれ申さず。又、此處如何にしても越えらるゝ所に非ず候故に相望むのみ。しかも手は岩角をつかみてに候。

以上は、金洞東山の大要、是より西山の勝ども聞え上ぐべく候。第一石門の所より、三四町にして中之嶽大國主神社の門前に達するに候が、妙義より直行一里十町餘と聞き申し候。既にして境内に入れば、巨岩天に朝するがござ候。これぞ朝日嶽と申され、右に大佛岩ござ候。

社務所の左に小橋あり、之を渡れば大國主神社、社格は鄕社にござ候。朝日嶽の眞下に至るには、二十四級と

嚴島より

日本三景の一として名高き此處、神社の百八の廻廊、海中の鳥居、千疊敷、彌山島廻り等は名高く、紅葉澗は幽邃の境にござ候。遊ぶには四時常によろしく候。

山口より

往昔は大內氏據り、中國九州に覇たりし

十七級と四十一級の石階を攀づるに候。隨分高く、七十七級のを登る際には、動もすれば足の戰くを覺え候。登り終れば開山長淸なる道士の碑、日本武尊神社ござ候。

上野國志には、巖高寺碑と致され居るに候。今や寺樓なく、魚磬の響きも亦絕えて、初冬の空に雲のゆき交ふのみに御座候。

朝日嶽の絕頂に至るには、又相當の險所ござ候。先づ岩の下より進めば波古曾神社、やがて小高き處に至れば谷に俯す。前面に巨岩立つ、八疊岩と申すに候が、その廣さの洞窟有る由、彼の長淸が栖みし處と傳へられ居るに候。その左に葛籠岩、右に獅子岩、相並びては烏帽子

地、文久三年には、毛利氏萩より移りし舊城下、數多の社寺の中にも、豐榮神社は、元就を祭れる別格官幣社にござ候。

岩國より

錦帶橋にて名高き此處、吉川氏の舊采地城址は對岸の横山村に探るべく、少しく隔てたれども汽船便もござ候。

德山より

毛利氏の支封地、中國街道の衝にして港灣を有し、運漕業最も發達致し居り候。大阪へ二百五十一海里、汽船會社共榮社の本據に候。

三田尻より

汽船は海に、汽車は陸に往來する此處、而も山口に接近する

岩、下手には馬鞍に似し烏越と呼ぶ岩もござ候。此處は朝日嶽の正背に當り居るに候。

少しく進めば、西山の山峽に遭ひ申し候。東山のに比ぶれば、長きも幅廣くして手係りの樹木あれば、危險の事決して感ぜざるに候。二三歩左すれば、石を割きて階を成す。そを二三段上れば鬼の鬚摩ござ候。東山の天狗の髭摩と、兄たり難く弟たり難き所に候。更に一段高き處に達するには、一間餘の鐵鎖に依るにて候。

大日峰とは、鐵鎖によりて登りし處、峰とは申せど其實は磐石、四邊より眺められ、景色稍宜しく候。もと大日如來の像安置せられし由に候も、今は石と石の間に投ぜられ、覗けばそれと思ふもの見ゆるに候。此處の下方の倉岩、石胎内なども御座候。

轟岩とは圓き巨大なる岩、架けられし梯子は二間餘にして六級ござ候。西山に於ては、實に第一の難所、容易に登られぬ處に候。岩の名は、轟木大尉が逆立試みし故との事に候。朝日嶽の絶頂には、更に八九歩進みて達すべく、其岩端に身を致し社の境内を俯瞰せられ候も、高しと申すのみにて、他に筆にする程にも非ず候。されど四邊に眸を放つには惡しからず候。

金鷄の勝を探るには、金洞より間道ござ候。正路は妙義よりするに候。僕は直に間道取りし仲間にござ候。一

港邑、商業殊に活發の地、馬關へ三十七海里に候。

下關より

繁華を申せば山陽の小浪華、軍備を申せば西海の鎖鑰、九州の門司と相對するの要津、懷古によきは壇浦、醉ふによきは稻荷町、處々に訪ふべき古蹟も少なからず候。

萩より

長門にて馬關に亞ぐの都會、市街は橋本松本の二川に夾まれ到る處に橋梁多く大阪の孫とも評したく候。城址は指月山に存し、天守閣は今に倘雲外に高く、有倉松も名所の一に數へられ、本丸橋の入口に榮えてみどり濃きに候。

○遊覽

日に二山をかくるもの、概ね斯くするとの事に候。金鷄は高さ二十餘町、一合目より八合目までには、通り天狗若權現、帆立岩等あれど、何れも稱するに足り申さず候八合目に至りて仰げば、直に岩石にして石筍天を刺し居り、その下よりは凹みて川狀を成すがあり、乾瀑と申すに候。右は勾配緩ぎ岩相續き、其下は直に山下に接し居り、僅かに草と木とを辨ずるのみ、その高きこと推して知るべく候。

先以て攀づべきは四ッ這岩、やがて馬の背渡、更に登れば亂れ聳えし尖岩の直下にして、右は山下に臨みし懸崖、左は親不知子不知と申す難所、例の乾瀑を越えて前岸に達する渡とも申すべき處に候。凡そ四ッ這岩より此處まで來る者は、十中の二三に之れ有り、此難所を越す者は有るなしかとの事に候ひしも、僕は辛うじて及第致し候も、何れも膽を以て行るべく、手足もて此にまで至らるべき事に非ずと存じ候。

乾瀑越ゆれば劍ケ峰。相變らず岩にて、斜めに伏せるもの、論ずるに足らず候。只その尖き風情、刀刃に似るよりの稱に候はん。二三歩にして、九合目の石標を得申し候。喘ぎつゝ危險を語り、やがて一升目に達し候。此處一升目と申すも、山の絶頂に達せんとせば、金鷄の山峽を渡るに候。又も金鷄の髭摩岩これ有り、例の如く身

四國だより

徳島より

四國中第一の繁華地に之れ有り、商業最も發達を見、鐵道は稱する足らざるも、汽船便は頻繁にござ候。城山と瑞巖寺の所在なる瀧の山は眺望に富み、市中にて隨一の遊眺地と申すべく候。

○遊覽

を横さにして通り抜け、少しく登りて最高の處に立つ人と相成り候。二基の扁石に御嶽神社、三笠神社と刻され居り候。遠望は、實に第一と申すべく候。

今日しも碧天萬里、榛名赤城の二山は、東北に烟鬟霧髻を弄し居り、筑波加波の二山は正東に、上武の平野を隔てゝ、雲煙縹緲の間に隱見するに候。顧みれば、夕陽既に西山に春き、而も脚下に在るに候。下山するには西手を過ぎ、二見岩、片手岩を見、再び乾瀑の下に出で、左して別路を下り、得しは洞窟なりしに候。

洞窟は奥行三十一間三尺、奥の池の深さは三丈一尺。初め上段の穴より入り、出づるには下方の穴よりするに

鳴戸

觀潮に有名なる此處阿波の孫崎と淡路の鳴戸崎と相距る僅かに十五町、その中間は卽ち鳴戸瀨戸、三月三日の大潮尤も宜しとの事に候。

劍山

登行四里十八町、實に雲に入るの高山、一の峠、二の峠、三て候。尋でお飾岩、行者場を過ぎ再び一合目の處に會し夜を犯して歸り申し候。妙義まで、行程約二里。是れ其一日なりしに候。此夜は、東雲館に宿し、早朝には上武平野の曉色を賞し、直に白雲山訪ひしに候。

先づ潛りしが二王門。次に夫婦杉、二樹の間に小石祠安置せらるゝも、樹の成長するに從ひ、樹身に沒し居り候。兒島高德の詠みしと申す小石碑、道士長淸の墓も此處にござ候。上方には一祠宇聳え、金碧燦然、殆ど人目を眩せしめ候。是ぞ鄕社妙義神社、昔は白雲山高顯院に屬し、妙義大權現と申されしものに候。更に本殿これ有り、背後には神木杉、其左に波古曾神社、鎭す。正面よ

の峠を經て達すべく山上には劍の社鎭せられ、寶藏亭、太郎笈、次郎笈など申す巨石之れ有るに候夏期に登るには朝早く立つも歸りは夜に入る由に候。

箸藏寺より

讃岐國琴平社の奥院と申されしは此處相距る五里、弘法大師の創立に候。

津の峰にて

僅かに登り十二町の山、山上に神祠ありて千年の松杉聳え、頗る海觀に富み、人をして快哉を連呼せしめ申す地に候。

太龍寺

那賀郡加茂谷村の名刹、山上に堂塔輪奐の美を極め、且つ境内は奇岩もて勝を成

りすれば右に方るに候。

裏木戸に出で候へば、山手に神馬殿あり、木馬を安置し、前額に鐵の弓矢を掲げ、百合若大臣鐵の御弓と記され居り候。又少し上に清泉ござ候。日本第三等の水と稱せられ、寒暑に增減せずの讃辭、例の通りに候。此泉、常には封じて汲むを許さず、宮家御登山の時にのみ開きて御飲料に供する由に候。

奥院へは山下より二十五町、石窟にして巨石天を成し居り、且つ穴ありて日光を入るゝに候。此に至るまで鶯の瀑、鞍掛岩、百合若大臣射貫岩ござ候。此岩は、汽車より其射貫きし所望まるゝとの事に候。尋で窟の大黑、天神の硯水、天狗の評定所、大蛇の岩屋、龍立の天神、釋迦ケ嶽ござ候。山の絶頂に達するには、龍立の天神側よりすべく、鳩胸と申す難所ある由、時間の都合により登らずして歸りしに候。此天神の地は、八犬傳の一人たる犬飼見八が住せりと申す名蹟に候。又、天狗より飛切と云ふ劍法を授かりし人あり。即ち念流元祖相馬四郎義元入道にて、今にも代々劍客を出すとの事に之れ有り、二王門の樓上には、義元入道に關する武器を額に致され居り候。

釋迦ケ嶽と申すは、一大巨岩に之れ有り、其岩端には竹を以て障子の骨の如くに組み、それに大の字形に紙を

し居るに候。その他靈蹟や什寶列擧に堪へず候。

高松より

松平氏の舊城下、大阪と交通頻繁に、十二萬石の面目、今に尙存し居り候。附近には、八島を筆頭に訪ふべきの古蹟勝地多く、栗林公園は名高く、林泉の妙を極め居るに候。

綾の松山

一に白峰とも申すにて、崇德天皇の御陵地、今は白峰神社ござ候。高屋村より山上まで二十五町に候又、白峰寺もござ候

阪出より

一港邑にして鐵道もござ候。商業やゝ繁華に、鹽は讃岐第一の產地に候。

○遊覽

結び着けしもの。此業極めて殺風景にござ候も、眺望は、佳絶、例の筑波と加波は申すに及ばず、近くは赤城榛名の山々を前に、左は天外に越中の峰巒を望み、其一角に白雪を戴けるが、朝日に映發してきら〳〵と、見るも眩き風情に御座候。山下は宿霧半ば晴れ候も、今朝東雲亭より見し海のさま殘り居るに候。俯すれば、紅葉未だ全く散らず、人をして今少し早からましかばと、甲斐なき事思はしめ申し候。午後は、東京に向ふ筈。記すればて限りなき事、精しうは紀行にて御覽願ふべく、例のなぐり書、意の足らぬ處はしか〳〵ならんと、御推讀相願ひ申すに候。東雲亭にて。

○祝賀

すべて、目出度事を祝ふを、祝賀と云ふのです。是等の文は、一定の法式があります。丁度正月に羽織きて袴着くる樣なので、文句にも相當の禮がなくてはならぬのです。けれども、此に擧ぐるのは其文例を示すのでなく、僕が友人が其他の人に贈つたのを擧げたから、中には筆の亂れたのもありませう。ですが、御互間に往復する手本にならぬ事もありますまい。目上の人や、世間に行はるゝ普通の例には、適切な書きやうとは申しません。其邊は、隨分御斟酌を願うて置く。

丸龜より

師團置かれて最も繁昌し、大に面目を一新致せるは此處。もと京極氏六萬三千石の城下、城址は市街の中央にござ候。

善通寺より

町と同名の寺之れ有り、塔は古からず候も雄々しく、弘法大師の誕生地として名高く、四國第七十五番の靈場にござ候

多度津より

四國沿岸にても有名なる港邑、戸數一千二百餘、市街は可なりの繁華なり。此地南は琴平に、東は丸龜方面へ行くべく、西は伊豫街道、海陸の要衝に候。

琴平より

辯護士開業を祝す

潛心御研究の功空しからず、辯護士試驗御合格、其一位占められしは、優良なる御成績爭はれぬ證據、御得意知るべく、直に御開業の事と存じ候處、案の條に今日の御運び、遙かに賀し奉り候。

後進の生、敢て希望を述ぶるに之れ無く候も、誠實に事に當らるゝは勿論、依賴者は多くは斯道に暗き人々に候へば、最も注意拂ふの要これ有るべく、世には看板を利用し、直に金錢に代へんとする輩も少なからず、終には依賴者の目的さへ皆無となる場合無きに非ず候。

總じて代理と申せば、殊に訴訟代理と申せば、實際に於て誠意に乏しきものに候はんも、依賴者に對しては手を取りて教ふる樣にしたく、生は既に經驗して不利を招ける一人に御座候。

世に訴訟を提起するものは、又提起せんとするものは百が百まで金錢の爭ひに止まらず、往々社會に警告を與へん爲のもの之れ無きに非ず、是等は露骨に申すと、兄等は骨折れて報酬少なき事件にて、俗に申す割に合はぬ仕事に候はんも、能く〳〵事の性質に鑑みられ、眞正なる天職盡され度、心底より願ふものに御座候。殊に田舍町にての御開業、別して心を致され度、右祝詞と致し候

○祝賀

間御取舍相願ひ候。頓首。

返信に曰く。雲箋奉讀。今度の開業御承知に相成り、早速の御祝詞有難く、御忠告の事共肺肝に銘じ、必ず等閑に付し申すまじく候。野生が晩學して此に及びしは、抑も詞兄と同一の意見に基づきしものに之れ有り候て、辯護士が衣食し易き考より、今日の事ありしには非ず候。何事にも變屈人の野生に候へば、斯業にても人氣男には成られまじく候も、法律を眞向には決して翳さず、何處まで誠意もてやる積りに御座候へば、暫く御見物願はしく候。但し藪醫者と同じく、或は門前雀羅を張るかも知れず候。呵々。

四國だより

琴平神社にて名高き此處、旅館は宏壯のもの多く、賽人宿泊の多き、伊勢の大廟に亞ぐとの事に候。神社は象頭山の半腹に鎭し、町より十町餘に候。

觀音寺より

戸數二千四百餘、有明の濱は風光明媚、琴彈八幡宮と觀音寺は名高く候。多度津より伊豫の方へ六里十二町の處。

松山より

久松家十五萬石の舊封、古城は青空に抽きんで、三津よりも望まるゝに候。此地東北に道後の靈泉を控へ、城址の眺望に宜しき、西南には星丘の古戰場、その附近に名蹟少なからず四國にても屈指の都城北へ御移居の由、其靜かなるは申す迄もなく、竹樹園を成して紅塵侵さず、詩家の君に適當の御宅と推するに難からず、と一しほ賀し奉り候。何れ其内清樽持參、祝意表し申すべく候。先は寸箋のみ、頓首。

返信に曰く。逸早くも御祝詞有難く、御書の如き住居にも之れ無く候へども、御推量のやうに竹樹は隨分茂り居り、苦吟して蚊に對抗するには惡しからず、淋しさは村にも勝り、電燈さへ水道さへ自由ならぬ地、御笑ひ下されまじく、呉々も御過訪待ち居り候。

轉居を祝す

○祝賀

會にござ候。

道後より

有名なる溫泉場、湯は透明にして、浴室頗る宏壯、旅舍や酒樓も可なりに之れ有り、所謂保養地には上等の方に候はん

石手寺

伊佐庭神社は町の上に鎭し、是亦有名の神祠にござ候。

聖武帝の勅建、隨分見事なる寺にて、塔や堂、古色掬すべく境内には櫻樹多く候。又、寺より一里餘、石手川の上流には涌が淵あり、一の勝地なりしも、水力電氣發源所となり俗化す。

今治より

松平氏の舊封に之れ有り、商業盛んにして、港は頗る繁華に

新宅祝はれし返事

來信に曰く。御新宅美事に成就、不日御移轉の由、賀し奉り候。世には舌頭にて五十萬圓以上の長者番附に載る器用な人も之れ有り候に、學兄は又、一本の筆にて今度の御經營、殆ど賀する詞を知らず、詩を作るより田を作れと嘲りし人。一言有るまじと存じ候。僕も貧生、一詩賀意を致し候。拜具。

拜復。新宅へ移轉は事實にござ候も、僕が建てしとは誤聞も亦甚しく、寧ろ滑稽と申すべく、一枝の筆にて萬金もたまりて堪まるもの乎。君は誰かに一杯かけられし狂言、但しは又、僕に一杯喰はせんとの事か、其是非は兎も角もの事、賀詩有難く頂戴、此上ごし〳〵書きため、君が言をして實となし度候。轉居御披露は改めてと、一寸御返事致し候。

歸宅を祝ふ

北陸の旅、無事に御濟し御歸宅の由、錦囊には珠玉滿ち同社の吟友をして驚嘆せしめ給ふ事に候はん。早速拜趨すべき筈に候も、名士の訪問に御多忙なるべく、と態と差し扣へ、一應の御喜び迄。頓首。

返信に曰く。今度の旅、夏のくせに雨多く、探勝は十

候。城址には吹揚神社鎮す。

仙龍寺

銅山川の左岸に在る名刹、川之江より行かば、三里餘もあるべき乎。所在は馬立村の溪間にして、勝蹟多く、本尊は弘法大師四十二の自像世に厄除大師と名高く候。境は眞に幽邃神仙の宿る所に候。

岩屋寺

上浮穴郡久萬町大寶寺の奥院、七鳥村に之れ有り、相距る三里餘。途上は青楓多く、寺は奇岩にて勝を成すに候。

大洲より

肱川に臨める一都邑加藤氏六萬石の城下戸數は八百餘、舟楫の便よき處に候。

○祝賀

が二三に過ぎず、獲る所極めて少なく、汗顔〳〵。歸後人來ること稀に、無聊に候まゝ御來遊願はしく、北陸の山水談、聊か聞え上げ申すべく候。

醫術開業を祝す

御開業の由、萬賀し奉り候。腐儒のやうに、醫は仁術などと申すまじく候も、我大阪にては、名醫程とかく尻重く困つたものとの評判高く候故、人の生命預り居ると申す一事、必ず忘れられまじく、況して田舍は親切を先と成され度、相も變らぬ老婆心、是も前日の交誼忘れぬしるしと、御咎め有るまじく候。敬具。

返信に曰く、御蔭にて歸郷の上開業、命有る迄もなく勉強する筈にて、決して他人にうしろ指さゝれ申すまじく、餘暇には今日を以て甘んせず、深く研鑽の覺悟、御安心下され度、取敢ず御返事のみ。

大學止めし友に

僕は君が大學を退かれしを賀す。大學は、報酬を多く貰ふ肩書を得るに過ぎず、世も亦皆然く思ふ故にて、君が爲には、幸福ならざるが故にて候。而も年々に卒業者は多く、成績優良の士に非ざれば、所謂もてず、こは何れの方面にても然るにて候。君は今後、自身に御研究却て

出石寺

金山と號する眞言の巨刹、大洲より三里餘、千里を見晴すべき境内に候。此山は黄金を以て骨とすると稱せられ、一時は採掘せんなど、問題となりし事もござ候

宇和島より

南豫の名邑、伊達家十萬石の封地、城樓今に存し、頗る觀るべく、附近には勝地多く、鐵道こそなけれ、海運は大に發達致し、四方に交通自由に候。宇和津彦神社、和靈神社、繼明神社は名高く候。又滑床山の雪輪の瀧は夙に文士間に騒げり

中村より

一條氏國司となりて治せし舊地、戸數六

○祝賀

御成功早かるべく、實力さへ有らば博士は眼前にぶらつき居るに候故、尚しも君が爲に賀する所以。この言、受け給ふや、如何に。君を成績不優良と見越してには非ず返信に曰く。御書面白く拜見。親と意見衝突と申しては、極めて兒に有るまじき儀に御座候も、學問その物直に金錢とはならず、親は直にその方針取り、月給取になり、高等官たれと自身のみの早合點、如何にも困つたものにて、終に學資の不給與となり、次に退校と決し候。苦學してもと存じ候も、それより好む方面に勉めたく、御書に接し大に意を強う致し候。委細は次便にと、只一筆の御返答まで。

出産を賀す

無線電信かゝり候處、令閨には御安産の上、目出度も御八男樣御出産の由、去年易者が申し候樣に、まだ此上にも御家門御繁昌の事と、羨ましく存じ候あまり、御秘傳授る事叶ふまじくやと相續者なき僕には、あやかりて賀し奉り候。近日愚妻伺はす筈に候も、取敢ず一筆返信に曰く。今度は内證と存じ候に、早速の御書實に恐入り申し候。産後母子共に健全、今度は何博士にして宜しかるべきか、と思案に呉れ居る小生、馬鹿博士丈は、何とかして逃れ度存じ候。拜復。

百餘、土佐にては名邑の一、愛宕山には一條神社ござ候。

金剛福寺

八十八ヶ所第三十八番の靈場、蹉跎岬の最端に之れ有り、海觀を以て勝とすべく又奇蹟も少なからず堂宇は莊嚴に候。

龍串の奇景

三崎村の海岸に屬し奇岩を以て勝を成すこと半里餘、里人は三十六景、四十八景或は七十八景と稱し土州第一の勝と誇るに候も、地僻にして其國の人さへ多く知らざること遺憾に候

桂濱

納涼と觀月とに宜しき地、桂濱とて宏壯なる海水浴用の高樓あり。地は浦戸の外

婚姻を賀す

貴兄には、目出度も御結婚なされ候由、さゞれ石の巖となりて苔の蒸す迄と賀し奉り候。新郎新婦御二人とも又なき御伉儷、御老親方には、如何に御喜びにや、遠き此處よりも見る樣にござ候。まだ少しさきの事にござ候も暑き三伏の頃と相成り候はゞ、御一緒に御來遊願はしく田舍の田舍、極めて淋しく候も地は海添にて、少し山手には温泉も湧き、一週や二週の御逗留には飽かせ給ふまじく、くれ〴〵も御待ち申し居り候　令閨は、淋しき里御嫌ひなさるべく候も、氣輕な僕ある事御傳へ、御勸め願はしく候。拜白。

就職を祝す

御目的通り、某銀行へ御就職のよし、幾重にも相賀すると同時に、前途限りなき御身に候へば、御精勵成されたく、是亦御勸め致し候。申す迄もなく、才學秀で給ひし貴兄、生が呶々するを要せず候も、實業會社は學問のみにて參らぬ事多く、隨うて議論と申す事は第二に置かれ居り、往々若手諸君の不平を招く事と傳聞致し候も、銀行その事業なるものは、議論にて營業出來るものに之れなく候へば、其邊は御含みおき然るべく、僕は此年にな

洋に面する濱べにして、長さ二里餘、砂は雪を欺きて白く、奇岩は殊に賞すべくして、後山は長曾我部氏の城壚存立、松樹蒼々たるに候。

吸江

此處、十景の選あるを以ても、推して地の如何なるを知り得べく、高知市の咽喉に候へば、一しほ名を揚げし事に候はん精しくは、例により日記にて。

高知より

戸數八千餘、山内氏二十二萬石の封邑、彼の名馬を内子の爲に買ひ得し一豐はその祖に候。市の内外には社寺を初め、吸江の勝景あり、頗る日記の材料多く、醉ふにも亦宜しき地。

○祝賀

りても書生風ぬけず、往事の所爲繰返し候へば、非は自身にある事今日に分り候故、御參考までに申し上げ候。斯樣に申すも矢張書生風、御笑ひ下さるべく候。

五十を賀す

少し事古く候も、大隅伯が百二十五歳説よりすれば、乳臭に比すべき御年に相當致し候はんも、僕は固より左樣迄は申さず、只是より彌趣味もて世に立ち給ふべしと賀するものに御座候。殊に人物なき山の中、慶應義塾卒業成され、都會の事業に立たゝせられず、悠然として故郷に安臥し、地方的の事に盡瘁せらるゝ儀、實に床しく存じ候。願はくば百以上までもと祈り、御名は事業に千秋迄も朽ちざれと、私かに存じ居り候。敬具。

全快を賀す

誠意を籠むること、神佛に願かくる樣に、蔭ながら御本復祈り居り候處、彌御快方との趣、何よりも嬉しく祝ひ奉り候。萬一の事有りては、我が地方の爲には金錢山程積みても、換へがたき御身と、逢ふ人毎に噂し合へる事に候ひしが、今日の事ありて大に安心致し候。さりながら、久しき間わづらひ給ひし御身、當分は御保養專一になされずば、御病みかへし氣遣しく候まゝ、御用心成

金剛頂寺

俗に西寺と稱し、廿六番の札所、大同年間弘法大師の創立せられしものに候。地は安藝郡室戸村大字元村に候。釣鐘には當山の由來を詳かに記せられ居るに候。

最野崎寺

此處、二十四番の靈場、俗に東寺と申し前記の寺と共に大師が同時に創立に係るものに候。所在地は室戸岬の最端に候へば、太洋を見晴して氣象大に、詩人は佛德よりもその景に有難かるべく候。而も當山は、登路八町の處にして、靈蹟少なからず、西は遙かに蹉跎岬に對し、眞に快哉を呼ぶ眺望にござ候。

○祝賀

されど度參上してとは心づき候も、例の能く申す貧乏隙なし、失禮御ゆるし下され度候。

返信に曰く。一代かゝりても、地方の爲に盡しきれぬ責任負ひながら、黃泉へ土產として旅する事かと存じ居り候に、命ありての事か、但しは又劫ざらしの不足にか、諸君の御蔭にて助かり申し候。此分ならば、最早大丈夫と存じ候も、構へて不養生の事など致すまじく、醫藥は申す迄もなく、暫く心を閑にし、思ひきりて病根たち申すべく候。御閑暇の時分には、時々御越し待ち奉り候。

○弔祭

俗に云ふ悔みの事であります。人の死去を弔ふ事を申すのです。すべて此種に屬する手紙は、眞情の流露せねばならぬのである。然し、假りに題を設けた作例には、極めて眞情に乏しく、且つ義理一片の物が多い。是は致し方もない事で、實際に臨まぬ筆、どうして眞情の露はれませう。然うは申せども、世間づきあひ、義理一片の悔狀には、隨分眞情にも乏しいが、是は亦致し方もない事です、此に示せるは實際に贈りしもの、文はまづくとも情は露はれて居ると信ずる。

九州だより

若松より

洞の海の咽喉にあたれる一商區、もと寒村なりしも、天保時代より漸く盛んに、現今は立派なるものにて、以前の若松には非ず、その發達實に驚くに堪へたる次第、是も時世の然らしめしに候。

福岡より

那珂川の西を福岡、東を博多と申すに候同市にして人氣自ら異なり、港も二ヶ所に分れ居り候。要するに九州の大阪とも申すべき地。附近には社寺や公園、見物する所頗る多く候。

太宰府より

態と天滿宮へ參詣致

逝ける學友の父に

遙かに一書奉呈仕り候。死は人の最も悲しむべき事に候に、敏夫君には、僅かに十八年の春秋を一期とし給ひ、歸らぬ水の流れの事思ふにつけ、轉斷腸致し候。況して御兩親様の御愁傷、喩ふるに物もなかるべく、御悼はしう存じ奉り候。

今日繰返すも益なき事に御座候も、敏夫君には、前途有爲の才を懷かせ給ひ、一朝病魔に襲はれ給ひ、終に白玉樓中の客となり給ふ、天道非乎と恨めしく候。校友は誰一人として、今度の御逝去惜しまぬ者ござなく、實に才學操行並に衆に勝れ給ひしは、長かるまじき御世なりしかと、浩歎に堪へざるの餘、不肖の身もて代るべきものをと迄存じ申し候。何れ人には終有るに候も、世に譽の花咲かせで、大志を地下に齎らし給へる御身、今し何事をか夢み居らせらるゝかと思へば、御在世の時の事ども、あり〳〵と心に描き出され、轉悲しく候。近くは御靈柩に御伴すべかりしを、隔てし此處に候へば相叶はず遙に御弔辭を呈し候。再拜。

父喪ひし友を慰む

打ち驚かれしは今日の御訃音、御尊父様は終に御養生叶

し候。二日市より小一里、頗る勝蹟多く殿宇は壯麗に候。彼の都府樓址は、之を北に探るべく候。

久留米より

商業殷賑、長崎や熊本の領分までをも蠶食したる趣見え居り候。而も交通至便兵營もござ候。水天宮は名高く、筑後川の東岸に鎭す。又、高山彦九郎先生の墓は、遍照院にござ候

小倉より

小笠原氏の舊封地、今は十二師團地として名高く、市内には觀るに足るの社寺多く、頗る繁華の地にござ候。

門司より

一足飛に都會に成れる地、馬關と僅か

はせられざりし由、平素御孝養深き貴兄の御事に候へば如何に御悲歎なるべき。さりながら、死は人の免れがたきもの、強ひて御諦らめ在らせられ度候。此世去り給ひしも、御事業の上には萬々死し給はず、築港に生き給ひ居るに候はずや。教育に生き給ひ居るに候はずや。交通機關の業に生き給ひ居るに候はずや。其他殖産工業一として、御尊父様の御貢献に非ずと申すは之れ無く、御功の程、實に世と共に亡びざるに候。只此上は、尙公共上に於ける御遺志繼がせられ候はゞ、何よりの御追孝かと存じ候。何れ此次の日曜には、一寸歸村の筈に付、何事も其節に聞え上ぐべく、御悔み旁斯の如くに御座候。

兄喪へる人に

未だ拜顏を得候はざれど、令兄とは同窓の友、今回の御不幸、實に驚愕致し、如何なる言の葉取出で、御悔み申して宜しきかと、男兒ながら不覺の涙に暮れ申し候。殊に五歳の久しき、都に歡苦を共に致し來れる小生、他の友に增して悲しく、骨肉に死別したると同樣に存じ候。御兩親樣には、御幼少の頃御別れの由、貴下の御境遇一倍の御愁傷、御同情に堪へ申さず候。さりとて、今は叶はせられぬ御事もなき跡の御弔ひこそ專一。尙希望聞え上ぐれば、亡兄上樣に代らせられ、地方に有益なる事業

九州だより

に一葦の水を隔て、海陸運漕至便の地。むかし、文字ケ關置かれしは此處。

彦山より

彦山權現は、今英彦山神社と申され、官幣中社、中世僧院の盛んなりし頃は三千六百坊有りと申すに候。村より二里山腹の鳥居より本社迄四十二町。

中津より

豐前第一の都會、城は黒田如水の築く所戸數二千七百戸、鐵道をも港をも有す。又、有名なる耶馬溪は此處よりするに候

耶馬溪より

詩人淡窓が、一百里唯隨澗轉、十三村總向山開と賦せるが如く、規模大なる山水

○弔祭

に御心寄せられ度、是も確かに御供養の一かと存じ候。其内自然拜芝の期も來り申すべく候も、御悔がてら思ふ事ども聞え上げ候。拜具。

附記

小叙に云ひし樣に、弔ふ事の手紙は其實に非ざるより は眞情を述べ難し。如何に趣向を巧にして書けばとて その實際の境に臨みし樣なる文は得るに六かし。故に此には數章を擧ぐるに止めたり。斯る題の作例は、何れの書にもあれど、その實を云へば云々と推測して書けるもののみ、誰にても斯る不幸の手紙を書くに際しては、最も眞情もて同情を寄せざるべからず。

○文範

何が故に、此に文範を擧げたかと云うと、僕が文の種別分を確かめん爲である。で……議論…教訓…風流…遊覽…祝賀…弔祭の六部門に對して、二三章宛を擧ぐる事にした。其擧ぐるには、尺牘と云うて、漢文に書いたものであるけれども、此には假名交りに譯する事にした。六ケしき熟語には、本文の末に注釋して、文の妙味をも故事の使用法をも知り易い樣にして置いた。のみでなく手紙と云うて、決して日本で云ふ樣な一寸したものでなく、學問も才も要る事が知らるゝであらう。

四國だより

の勝區に候。その勝限るべきに非ざれども、二十四景の目ござ候。是も亦候日記に讓り申すべく候。

宇佐より

官幣大社宇佐八幡宮の鎮座地、和氣清麿の事は、夙に史に明かに候。殿宇は偉麗境内に散在する攝社末社は、殆ど列擧に堪へぬ程に候。

大分より

豐後第一の都邑、縣の治所に候。此處もと府内と申し、國府の所在地、大友累代の封地、故にその創設に係る佛刹多く候。のち諸氏據り、舊城内には縣廳ござ候

佐賀より

鍋島侯三十萬石の巖城下、肥前にては

九州だより

○議論

汪思卿が師友を求むるに與ふ

方夢徵

龍源の中、與に同じうすべき無し。但白雲山に在り、丹楓水に映ずる在る而已。朝に一たび、夕に一たび、遂に以て良朋心に會ふことを爲ば、何ぞ必ずしも多言ならん目を擧ぐれば、三益に非ずといふこと罔し。同行厥れ我が師あり。豈に獨り人に於て然らんや。

三益　三友を云ふ。論語の季氏篇に見ゆ。

同行云云　吾が師あり。論語の述而篇に見ゆ。三人同じく事を行ふ、其一は我なり。他の二者一は美、一は惡なれば、我れその善に從うて其惡を改む、是れ二人皆我が師との義。

門人に示す

吳從先

學者は須らく、先づ氣象を理會すべし。氣象好き時、百事自ら當ると。此言最も好し。玩味するに、言語動靜は便ち是れ氣象を理會する、地頭急を變じて緩と爲、激烈を變じて和平と爲るときは、則ち大功あり。亦禍を遠くるの道なり。但に氣象のみに非ず。

氣象云云　士は氣質を先にして文藝を後にす。

餞者に答ふ

許以忠

世人行者に、類ね儀物を以て之を賞す。君獨り我を賞す

長崎に亞ぐの繁華地社寺の觀るべきも亦多く、佐賀縣の治所に候。

唐津より

小笠原氏の舊采地、戸數二千戸、鐵道と港とを併有し、市街繁華に、城址は高見にして眺望に宜しく花亦多く候。

武雄より

嬉野と共に有名なる溫泉場、三面皆山にかこまれ、東南のみ開き、蓬萊山下には公園ござ候。

長崎より

德川時代に外國奉行を置き、外國通商を管せしめし地に之れ有り、西洋的文明は何れも此處よりしたるに候。往時の盛なしと雖も、肥前第

るに詩文を以てす。之を杖頭に掛け、夜行せば照珠あらん。何ぞ必ずしも驪歌を唱へ杯酒を勸めて、陽關道上に戀々たらんや。

阮宣、百錢を以て杖頭に掛けて至る、酒ありや否や、便ち獨暢飲す。

行者　旅行者と云ふに同じ。

驪歌　別離の詩歌。

○教訓

友人に自修を勸む

許以忠

語に曰く、人を毀る事を好むものは、德日に遷り、人の毀るを幸とするものは、德日に崇しと。吉士は修を好む惟古語を引いて自ら慰せん耳。然らずんば方寸溪谷、對面九嶷、人心の險しき、何ぞ能く其をして平かならしめん哉。

九嶷　山の名、舜、南のかた巡狩して九嶷山に葬る。九峰あり、相似て異なるなり。

子の貧を厭ふを戒しむ

司馬徽

聞く汝、役に充て、室、罄を懸くるが如しと。何を以て自ら辨ぜん。德を論ずるときは、則ち吾れ薄し。居を說くときは、則ち吾れ貧し。薄きを以て志壯ならず、貧うして行ひ高からざること勿れ。罄云云　何者もなきを云ふ。

沈太史に功を立てんことを

九州だより

一の都會、寺院は觀るべきもの多く、諏訪神社の祭典は有名にござ候。

佐世保より

吳や舞鶴と同じき軍港、もと一寒村に過ぎざりしを、海を埋め山を崩し、終に大市を開きしにて、小海峽を西に出づれば直に支那海に進まるるに候。

隈府より

別格官幣社菊池神社の所在地、社は城址に鎭し、彼の南朝の忠臣菊池武時一族を奉祀するものに候。熊本へ六里餘。

田原阪より

明治十年役の激戰場にして、碑あり當時のさま記す。地は植木町より木葉町に至

九州だより

○文範

勉めしむ

黃河清

二百九十八

足下は名世の才なり。敬亭の靈を鍾め、宛水の秀を孕むこと、三百六十年、吳許公が美を繼で、閭里艶覬せずと云ふこと莫し。弟獨り然らず。願はくは、不朽の事業を以て足下に望まん。吳許公は艱難の秋に當り、足下は盈盛の世に値ふ。事業當に之に百倍すべし。其靈に背くこと無く、其秀に背くこと無くば、可なり。艶覬　こと。

艱難云云　艱難に當る時は力を爲し難く、盈盛の世に値ふ時は功をなし易し。

○風流

途中に別を恨む

張沛

風雨長途に去る、迢々たる別意、耿々たる離愁、江雲態を變じ、波濤色を作す。俄かにして風歛まり、雨歇み、月影空に横はる。酒に對して狂歌すれば、頓に天地を空しうす。竟に知らず、身の盈々たる一水の間に居ることを。恨むらくは、足下と此良夜を同じうすることを得ざることを。其れ天涯を如何せん。詩に曰く。盈々一水望中遙なりと。

迢々……離愁　遠く別れて戀しく思ふことを云ふ。

○文範

秋夜に請じて會飲せしむ

洪有眞

二百九十九

る途中にござ候。

熊本より

申す迄もなく肥後第一の都會、現在の城は、加藤清正の築きしもの。十年の役には、谷少將が籠城せられたること、稍古く候も、誰も知るとにて候。市の附近には、勝蹟多く候へば客として遊ぶ人は、見物に宜しく候。

八代より

球摩川の河口の都邑その繁華熊本につぐの地、山河襟帶、頗る形勝を占め居るに候。八代宮は官幣中社、征西將軍懐良親王を奉祀するに候

宮崎より

日向第一の都會、大淀川の下流に沿うて市街を成し、赤江港

明月花を弄し、好風曲を吹く。此夕何の夕ぞ、知己の者と樂を共にする無かるべけんや。清酒一壺を覓め得たり足下と徹夜歡ばんことを卜す。竚ち竚つ。

秋懷

吳從先

足下に別るゝこと久し。憶ふに、池上の荷風、溪邊の夜月、膝を促めて長吟せん。此樂何ぞ極まらん。而今も衡山鴈を阻てゝ、空しく三秋の想を抱く。但見る、草角花鬚濺淚となり、烏啼猿咲、總て悼心を成ることを。識らず、清暇の餘、亦念及するや、否や。三秋　九秋に同じく秋のこと

衡山　衡山の鴈回峰は衡洲に在り。山至つて高く、雁此に至つて飛び過ぎず。

○遊覽

人の淅江に之くを送る　吳從先

錢王の事業、伍相が精魂、悉く虎丘に在り。君が襟懷高古なるを以て、勝を其間に覽ば、景を撫して徘徊すること無くんばあらず。況や池水人を助くるをや。此去らば筆花錦を添へん。歸り來らば、詩酒の江山、柳花の風月幸はくは、當に我輩と平分すべし。

錢王　浙江に錢塘あり、錢氏之に鎮たりき。

伍相　伍子胥、鴟夷して即ち此地に浮べり。

池水助人　謝眺南遷の後、文字日に勝る、人謂ふ池水人を助くと。

を有す。もと寂寥たる一驛に候ひしも、維新後次第に繁昌し終に今日に及び、現に宮崎縣廳の所在地に御座候。

○

宮崎宮は官幣大社神武天皇を奉祀するに候が、鎮座地は大宮村字下北方船塚にして、宮崎より三十町餘。實に萬世一系の基を開かせられし靈跡にござ候。

都城より

戸數二千餘の繁華地山間なれども交通便に、大隅街道の要衝島津義久天壽元年五十町村に城砦を築き候て、都城と名づけしより、終に地名となれる由に候。

延岡より

五箇瀬河口にして、

謝中書が山川を美するに答ふ

陶弘景

山川の美、古今共に談ず。高峰雲に入り、清流底を見、兩岸の石壁、五色輝を交へ、青松翠竹、四時俱に備る。曉霧將に歇まんとして、猿鳥亂れ鳴き、夕日頽れんと欲して沈鯉競ひ躍る。寔に是れ欲界の仙都、康樂より以來未だ復其奇を與にするものあらず。

康樂　謝靈運家は康樂、東晉の時、永嘉の太守たり。好んで名山大澤に遊べり。

吳に遊ぶを送る

吳從先

數載床を連ね、一朝袂を分つ、情や堪へ難し。壯士天涯の志ありと雖も、而も故人寧ろ南浦の涙なからん耶。金陵の風景は、古來の名勝、君若し栖霞牛首に登らば、須らく意を着けて題詠すべし。庶はくは、山水人を笑はざらん。事凱らば早く旋るを幸とす。

天涯志　男子は志、天涯に在り。

南浦　長亭、別を送るの處。

金陵、栖霞、牛首　共に南京の地。

○祝賀

金體吾が五旬を壽す

寗仕衛

伯玉自ら非を知り、淵明且に組を解かんとす。衛先が幕

海岸に接近せる小都邑、山水の勝景に富み、到る處句を拾ふに宜しく候。

鹿兒島より

續日本紀にも、三代實錄にも見えし地、人口七萬餘、東は錦江灣を隔てゝ櫻島に對し、風光明媚。鐵道開通以後、殊に繁華を加へたるが如くに感ぜられ申し候。

○城址は俗に城山と呼び、古は鶴丸城と稱せりとの事に候。彼の西南の役、南洲翁の自刄せる岩崎谷は山後の狹谷に候。今は有志の爲に保存せられ居るに候。又市の內外には、訪ふべき勝蹟頗る多く、仔細に日記に上すは獨り古人の備忘のみならず、他に知らす

古、茲に乃ち今に稱す。老丈本海陽の一柱、壺を肆に懸く。其れ綠水青山を以て、黃精とする乎。直に大衍の數に從ふ。積で千百萬に至るも、筭未だ艾きざるなり。儀と章と合併して陳ぬ。倘し多客を煩さずんば、須らく彭祖張果二老仙を徼めて鳳凰に騎り、南山を把つて酒杯當てゝ以て献ずべし。

白玉　白玉行年五十、方に四十九年の非を知る。

大衍數　易の大衍の數五十。

友人の女を得しを賀す　　俞紹

瑞、坤祥に洽くして、慶、巽索に符ふ。玉麟抱き送りて老子の行を遲つと雖も、雌鶴雄飛、漫に歐陽が想を慰す。

瓦聲清聽、門楣に任ずるに足れり。

坤祥、巽索　坤巽の卦は長女に應ず

歐陽が想　歐陽修夢むらく、雌雄に化して飛ぶと　　吳從先

屋を創むるを慶す

鼎建雲に入りて、燕雀も亦躍る。然れども、萬間の下に在る者を審にするに、寧ろ趨き賀せざらんや。自ら揣るに桑樞の子、裾を門閭の高大に曳くに任へざる耳。寅んで數聯を具へて、以て晋頌を申ぶ。希はくは、之を置け。萬間の下　杜安、大厦千萬間のものを得、天下の寒士、盡く顏を歡ばしめたり。

桑樞子　桑樞は蓬戶。子を添へて、賤しきものとの義。

晋頌　晋の献文子、室を成す、張良が

曰く、美なる哉輪焉、美なる哉輿焉、斯に歌ひ、斯に哭し、國族を斯に聚める。君子之を善頌と云ひき。

にも宜しかるべくと存じ候。

大磯

一に仙殿園と申し島津家の別館地、園中の喜鶴亭は、現に島津の邸宅。此に夙に十六景あり、以て其一斑を知るに足るに候。

櫻島

周回十一里、中央には御岳聳えて噴火す俗に、上り三里と申すに候。島上には櫻島神社、古里と有村と黒神との三温泉これ有り、有村は鹿兒島人士の爲に賑かに候。附屬の烏島は宛然たる盆景、清泉湧くが妙にて候。

葉書通信 終

○弔祭

友を哭す

吳從先

嗟しい哉、天道知ること無うして、竟に玉樓の文を以て、我が友人を奪ひ去る。僕之を聞いて、肝腸盡く〳〵裂く。恨むらくは、鐵衣を統べ、金劍を佩び、天門を撞き破りて、復吾が友を奪ひ歸し、廣寒の衆侶をして、寂寞として無聊ならしめざることを。如何ぞ璽符握中に在らざる徒らに以て涕泪潸々として、子期が痛を抱いて、身を終るまで復琴を鼓せざらん耳。

李賀將に死せんとす、緋衣せる人の之を促すを見て曰く、天帝爾に命じて白玉樓の記を作らしむと。

玉樓

以上の外、其作限りないけれど、今暫く此に止めておいた。最初に美文風と云ふたが、支那は最初より立派な美文風ふ如き風の手紙の書翰があつたのです。今僕等が云てそれを、今更のやうに、美文風と云ふのが、實は可笑しい感じがします。

僕が手紙 終

大正二年五月十五日印刷
大正二年五月二十日發行

定價金參拾五錢

著作權所有

著作者　詩歌之助

發行者　大阪市南區瓦町三丁目二十七番地　松本善吉

印刷者　大阪市南區安堂寺橋通二丁目卅六番屋敷　山田元吉

發賣元　大阪市南區心齋橋通安堂寺町南へ入　田中宋榮堂

274
115

終